

みる・かたる・つくる
千葉県立美術館年報

昭和56年度

CHIBA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



千葉県立美術館全景

目 次

ご あ い さ つ	1
沿 革	2
管 理 運 営	3
機 構	5
施 設	13
事 業 報 告	17
常 設 展	19
特 別 展	21
企 画 展	28
千葉県芸術祭	36
団 体 展	38
教育・普及	44
昭和56年度事業一覧	54
利 用 状 況	56
日 誌 抄	57
関 係 令 規	58

ごあいさつ

昭和56年度千葉県立美術館の経営実績を主体にした年報を刊行し、関係者の皆様にお届けすることになりました。

本館は、昭和49年10月開館以来、関係各位の御協力・御支援により“みる・かたる・つくる”をモットーに、大衆化に努めてまいりました。

昭和56年度は、“みる”活動の展示事業として、「肉筆浮世絵展」・「浅井忠と京都洋画壇の人々」の特別展をはじめ、収蔵作品展・移動美術館を含む企画展を開催し、年間 176,070 人の入館者を迎えることができ、特別展「浅井忠と京都洋画壇の人々」の最終日（昭和57年1月17日）には、ついに 100 万人の入館者に達しました。

“かたる・つくる”活動としては、各種の実技講座を通して作品制作の喜びや楽しみを、また、美術の見方・考え方を深めるための美術館夏季大学など、広く・多くの皆様に親しまれる開かれた美術館を目指して継続的に実施してまいりました。

一方、資料収集につきましては、地域に根ざした美術館を基本としながら、日本近代洋画の先駆者・浅井忠を軸に、近代美術史の宝庫を目指しており、調査・研究と相まって千葉県美術品取得基金条例を活用して、収蔵作品の充実を図ってまいりました。

このように、地域の美術館としての活動も軌道に乗り、充実期を迎えようとしておりますが、昭和57年度は更に飛躍しなければと考えております。

今後も、更に反省を加え、より充実した美の広場としての活動を推進する所存ですので、関係機関・諸団体並びに、皆様のなお一層の御指導と御支援をお願いする次第であります。

昭和57年4月

千葉県立美術館長

高 橋 在 久

沿革

概要

千葉県立美術館は、昭和43年にまとめられた県立博物館設置構想に基き、建設計画をすすめ、昭和48年4月教育庁文化課に美術館準備班を置き、開館事務にあたった。同49年3月第1期工事の展示棟が完成し、4月1日千葉県立美術館として機関設置し、10月23日開館式を挙げ、一般公開を始めた。同51年2月第2期工事の管理棟が完成した。

なお、千葉県の第5次総合5ヶ年計画により、第3期工事として、県民アトリエの建設に昭和54年3月27日着工、同55年2月29日竣工し、ここに当初建設計画は完了した。

運営方針

- 県民のための美術館として、明るい親しまれる美術館。
- 学校教育・社会教育との関連から、教育普及活動を重視し、楽しく学べる美術館。
- 県民と美術家との交流の広場とし、相互の理解と向上を図る美術館。
- 房総の地にかかわりのある作家の作品と、関係資料の収集と研究をめざす美術館。
- 美の広場として、広く美術資料・情報等を収集し、みる・かたる・つくる活動を総合的に展開する美術館。

昭和44年12月9日 第1回千葉県立美術館建設懇談会が開かれる(委員15名)

昭和45年1月19日 県立美術館建設の請願書が2月県議会で採択される

昭和45年7月24日 建設地として千葉公園に内定する

昭和45年11月12日 第1回美術館設置準備専門委員会が開かれる(委員10名)

昭和46年3月31日 千葉公園内の美術館基本構想成る

昭和46年6月24日 体育館移転問題等で千葉公園内建設が不可能となる
代案として千葉中央港埋立地が提示される

昭和47年1月5日 建設地を千葉中央港の埋立地に決定し、使用について開発庁長と教育長で覚書を交換する

昭和47年3月31日 基本設計完了する(株式会社大高建築設計事務所)

昭和47年7月31日 展示棟 第1期工事の実施設計完了する

昭和47年10月13日 展示棟建築工事請負契約議案可決される

昭和47年12月10日 展示棟建築工事着工(管理・大高建築設計事務所、施工・株式会社竹中工務店)

昭和48年4月1日 文化課に美術館準備班を置き、開館事務にあたる

昭和48年11月30日 管理棟 第2期工事の実施設計完了する

昭和49年3月31日 展示棟建築工事竣工

昭和49年4月1日 千葉県立美術館発足する職員14名

昭和49年10月23日 開館記念式典を行なう

昭和49年10月24日 開館記念展「千葉県美術展覧会」を開催 一般公開を始める

昭和50年3月13日 管理棟建築工事請負契約議案可決される

昭和50年3月15日 管理棟建築工事着工(管理・大高建築設計事務所、施工・株式会社竹中工務店)

昭和51年2月15日 管理棟建築工事竣工

昭和51年3月2日 管理棟完成記念特別展「浅井忠とその師弟展」を開催する

昭和51年6月7日 寄付によって、正面玄関に植栽を行なう

昭和52年3月12日 彫刻の屋外展示をはじめる

昭和52年4月10日 展示棟の一室に美術普及室を開設する

昭和53年1月18日 外構工事として、駐車場が拡張され、101台の収容となる

昭和53年2月21日 美術普及棟の準備会が発足する

昭和53年10月17日 債務負担行為によって美術普及棟建築予算がつく

昭和53年11月18日 浅井忠像 完成除幕式

昭和53年11月30日 美術普及棟実施設計完了する

昭和54年1月8日 美術普及棟を県民アトリエと改称する

昭和54年3月5日 県民アトリエ建築工事請負契約議案可決される

昭和54年3月27日 県民アトリエ建築工事着工(管理・大高建築設計事務所、施工・株式会社竹中工務店)

昭和55年2月29日 県民アトリエ建築工事竣工

昭和55年3月16日 県民アトリエ完成記念講演会

昭和55年9月9日 県民アトリエに情報資料室を開設する

管 理 運 営

昭和49年10月開館以来，7年余りを経過して，県民の参加する文化活動としての“みる・かたる・つくる”活動がようやく定着し，地域の美術館として力強く歩み出すことができるようになった。入館者数も年毎に増加し，昭和57年1月には，100万人に達した。このように県民の芸術文化に対する関心も高まっていることから，更に，利用の拡大に力を注いでいきたい。

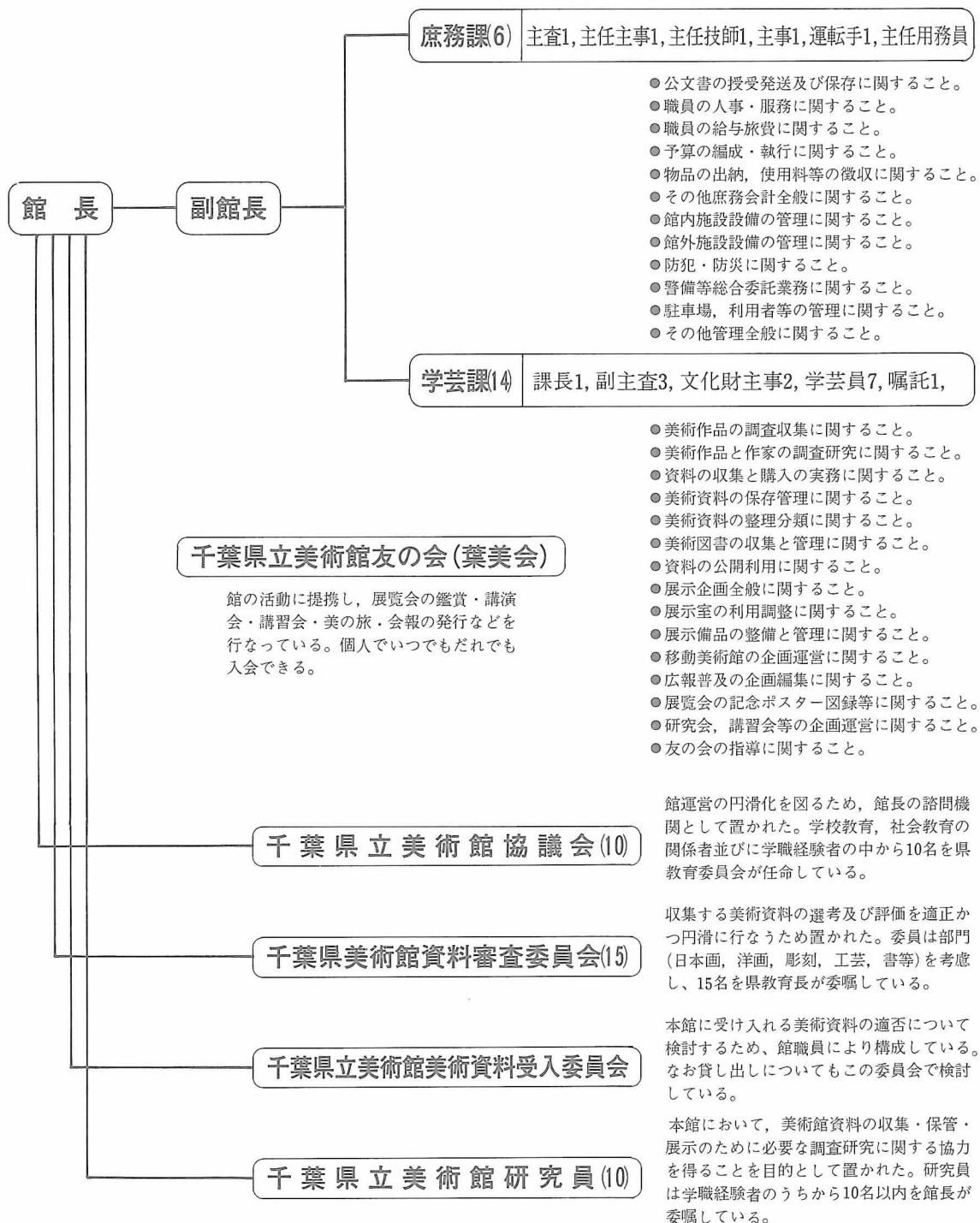
施設では，当初の建設計画通り，展示棟・管理棟・県民アトリエの三棟が完成し，現在は，設備・内容の充実を目指している。また，本館の特色となっている県民アトリエは，単に「みる」だけでなく，「かたる・つくる」活動を通して，美術に対する体験と理解を深めるために，各種の事業をすすめている。

美術館資料の収集も，順調な伸びを示しており，特に昭和55年度に制定された千葉県美術品取得基金条例を活用して，その充実を図っている。

残された問題は，平日の交通の便である。日曜・祝日なみに直通バスが運行されるように，一層の努力をはらっていきたい。

なお，今後さらに，調査研究を重ね，事業の充実・発展を図り，県民の親しまれる，明るく楽しい美の広場となるよう努めていきたい。

組織および事務分掌（57.3.31現在）



職 員

館 長 高 橋 在 久
副 館 長 安 増 順

庶 務 課

課 長 高 梨 義 男
(昭和56年6月15日付で転出)
主査(課長) 内 山 昭 氏
(昭和56年6月16日付で転入)
主任主事 菅 井 富 美 子
主任技師 田 辺 正 憲
主 事 一 杉 徹
運 転 手 篠 原 恒 雄
主任用務員 長 島 則 子

学 芸 課

主査兼課長 高 橋 瑛
副主査(普及室長) 高 木 正
文化財主事 鈴 木 喜 久 夫
副 主 査 加 曾 利 和 夫
学 芸 員 中 村 哲
副 主 査 田 村 潤 子
文化財主事 宮 内 速 男
学 芸 員 大 久 保 守
〃 藤 川 正 司
〃 前 川 公 秀
〃 佐 久 間 文 孝
〃 山 内 章 子
〃 小 泉 幸 代
嘱 託 松 本 衛

千葉県立美術館協議会委員

氏 名	役 職	氏 名	役 職
◎浅見 喜舟	千葉県美術会会長	田中 稷	美術評論家
遠藤 健郎	画 家	中村傳三郎	美術評論家
釵持 徹	県立生浜高等学校長	野口 貞子	千葉市婦人グループ 連絡会役員
笹岡 了一	画 家	牧田 茂	白梅学園短期大学教授
○鈴木 民三	県立美術館友の会会長	成家 雄耕	茂原市立富士見中学校長

◎議長 ○副議長 (五十音順, 敬称略)

千葉県美術館資料審査委員会委員

氏 名	役 職	部 門	氏 名	役 職	部 門
植村鷹千代	美 術 評 論 家	洋 画	中村傳三郎	美 術 評 論 家	彫 塑
陰里 鐵郎	東京国立文化財研究所 主 任 研 究 官	洋 画	細野 正信	東京国立博物館 主 任 研 究 官	日 本 画
金子 量重	大妻女子大学講師	工 芸	堀江 知彦	二松学舎大学教授	書
河北 倫明	美 術 評 論 家	日 本 画 (洋画)	本間 正義	美 術 評 論 家	彫 塑
桑原 住雄	美 術 評 論 家	洋 画	前田 泰次	美 術 評 論 家	工 芸
郡司 幹雄	千葉県文化財保護 審 議 会 副 会 長	彫 塑	松下 英鷹	美 術 評 論 家	書
弦田平八郎	神奈川県立近代美術館 副 館 長	日 本 画	山本 信吉	美 術 史 家	書
友部 直	共立女子大学教授	工 芸			

(五十音順，敬称略)

千葉県立美術館研究員

氏 名	役 職	氏 名	役 職
飯 田 能 弘	海上町立海上中学校教諭	香 取 義 春	佐原市立福田小学校教頭
池 田 伊 予	千葉市立末広中学校教諭	佐 藤 修	佐原市立佐原中学校教諭
石 倉 総 子	千葉市立花園中学校教諭	田 辺 宏	勝浦市立勝浦中学校教諭
岩 沢 いづみ	千葉市立さつきが丘中学校教諭	利 倉 栄 子	千葉市立天戸中学校教諭
大 木 貞 夫	八日市場市立第一中学校教諭	原 田 久 徳	千葉市立新宿中学校教諭

(五十音順，敬称略)

昭和56年度予算概要

(単位：千円)

事 業 名	予算額	事 業 概 要
営 営 費		
展 示 事 業 費	20,306	特別展 2 事業，企画・常設展 5 事業
普 及 事 業 費	3,473	館報・しおり発行，実技講座・講演会実施等
調 査 研 究 費	1,380	資料調査，研究会開催等
維 持 管 理 費	107,313	館舎管理委託，協議会開催等
施 設 整 備 費		
施 設 整 備 費	24,200	資料・図書・展示用備品・アトリエ備品購入
計	156,672	

収蔵資料 (昭和57年3月31日現在)

収蔵別内訳

種別	区分	保管換	購 入	寄 付	合 計
日 本 画		2 3	2 5	4 6	9 4
洋 画		5 1	1 2 1	2 5 5	4 2 7
彫 塑		1 0	2 4	1 4	4 8
工 芸		9	3 2	2 8	6 9
書		1 4	1 3	8	3 5
版 画		3	8 4	4 0	1 2 7
合 計		1 1 0	2 9 9	3 9 1	8 0 0
研究資料		7 3	8 6	2 9 8	4 5 7
教育資料		1 1 6	0	2 3 9	3 5 5
合 計		1 8 9	8 6	5 3 7	8 1 2

昭和56年度新収蔵作品一覧

日 本 画

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	浅 井 忠	種 ま き の 図	不詳	紙 ・ 着 彩	139.0×30.0	寄 贈

洋 画

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	浅 井 真	太 海 海 岸	昭和35	キャンバス・油 彩	41.0× 53.2	寄 贈
2	〃	五 月 の 海	昭和35	〃	40.6× 31.5	〃
3	〃	石	昭和43~44	〃	38.0× 45.6	〃
4	〃	石	昭和37	〃	33.5× 45.8	〃
5	〃	岩 B	昭和37	〃	45.6× 53.0	〃
6	〃	秋 の 山	昭和44	〃	24.4× 33.5	〃
7	〃	雪 の 丘	昭和22	〃	45.6× 60.4	〃
8	〃	錦 繡 の 山	昭和20	〃	53.3× 65.4	〃
9	〃	見 晴 砦 泉	昭和42	板 ・ 油 彩	33.5× 24.5	〃
10	〃	春 雪	昭和39	キャンバス・油 彩	24.5× 33.4	〃
11	〃	四 月 の 海	昭和34	〃	33.5× 45.5	〃
12	〃	早 春	昭和35	〃	33.3× 45.5	〃
13	〃	裏 磐 梯	昭和35	板 ・ 油 彩	41.0× 31.5	〃
14	〃	秋	昭和22	キャンバス・油 彩	53.0× 65.5	〃
15	〃	裏 磐 梯	昭和30~31	〃	45.5× 53.2	〃
16	〃	伊 那	昭和45	〃	38.2× 45.7	〃
17	〃	雪 山 遠 望	昭和27~28	板 ・ 油 彩	23.9× 33.0	〃
18	〃	雪 景	昭和18~19	キャンバス・油 彩	53.3× 65.3	〃
19	〃	戸 隠 秋 色	昭和46	板 ・ 油 彩	24.0× 33.3	〃
20	〃	雪 と 石	昭和39	〃	31.8× 41.0	〃
21	〃	裸 婦 D	昭和34~35	キャンバス・油 彩	27.4× 41.3	〃
22	〃	習 作 5	昭和34~35	板 ・ 油 彩	23.4× 33.5	〃
23	〃	裸 婦 C	昭和34~35	〃	41.0× 31.3	〃
24	〃	習 作 7	昭和34~35	〃	33.2× 23.9	〃
25	〃	梅 林	昭和23	キャンバス・油 彩	53.0× 73.0	〃
26	〃	梅 林	昭和35~36	〃	45.5× 37.7	〃
27	〃	雑 木 山 と 梅	昭和37~38	板 ・ 油 彩	31.7× 40.5	〃

番号	作家名	作品名	制作年	材質・形状	寸法	受入方法
28	浅井 真	赤 軸 の 梅	昭和50	紙 ・ 油 彩	27.3× 22.2	寄 贈
29	〃	A 嬢 像	昭和 6	キャンバス・油 彩	64.8× 53.5	〃
30	〃	シ ク ラ メ ン	昭和37~38	〃	41.2× 31.8	〃
31	〃	秋	昭和40	〃	31.8× 41.3	〃
32	〃	シ ン ビ ジ ュ ウ ム	昭和48	〃	45.7× 37.8	〃
33	〃	山 百 合	昭和35~36	〃	53.2× 45.9	〃
34	〃	け し	昭和35~36	〃	53.2× 41.0	〃
35	〃	唐 松 林	昭和38	〃	53.5× 45.7	〃
36	〃	秋 色	昭和43~44	〃	41.0× 31.6	〃
37	〃	新 緑 の 雑 木 林	昭和38	〃	53.6× 45.6	〃
38	〃	晩 秋	昭和46	板 ・ 油 彩	40.8× 31.8	〃
39	〃	沼	昭和35~37	キャンバス・油 彩	46.0× 33.5	〃
40	〃	林	昭和17~18	〃	72.2× 53.4	〃
41	〃	初 秋 の 山	昭和38~39	〃	24.3× 33.3	〃
42	不 破 章	描 く O 君	昭和17	紙 ・ 水 彩	75.0× 56.0	〃
43	〃	裁 縫 女	昭和18	〃	98.0× 68.0	〃
44	〃	ハ ン ブ ル グ	昭和38	〃	70.0× 104.0	〃
45	〃	バ ン コ ク の 水 辺 市	昭和41	〃	86.0× 128.0	〃
46	〃	白 い 砂	昭和42	〃	87.0× 128.0	〃
47	〃	支 那 服 の 女	昭和44	〃	75.0× 55.0	〃
48	〃	台 湾 農 村 風 景	昭和45	〃	57.0× 77.0	〃
49	〃	二 女	昭和28	〃	101.5× 134.0	〃
50	〃	三 人 姉 妹	昭和31	〃	101.5× 136.0	〃
51	〃	浴 衣	昭和35	〃	104.0× 70.0	〃
52	〃	ノルマンジーのホテル	昭和40	〃	87.0× 128.0	〃
53	〃	奥 鬼 怒 の 湯 治 場	昭和51	〃	95.5× 130.0	〃
54	〃	麗 日 新 宿 御 苑	昭和52	〃	94.0× 128.0	〃
55	〃	台 湾 の 農 家	昭和53	〃	94.0× 127.0	〃
56	〃	榕 樹 の 家(安平城址)	昭和45	〃	55.0× 75.0	〃
57	〃	白 い プ ラ ウ ス	昭和49	〃	76.0× 56.0	〃
58	〃	ル ッ セ ル ス ハ イ ム	昭和49	〃	95.0× 127.0	〃
59	〃	御 苑	昭和49	〃	50.0× 65.0	〃
60	浅井 忠	欧 州 市 場 風 俗	明治36頃	絹 本 ・ 水 彩	24.3× 33.0	購 入
61	〃	皇 太 子 馬 上 像	明治38頃	紙 ・ 鉛 筆	48.2× 33.2	〃
62	安井曾太郎	デ ッ サ ン(裸婦)	明治40	紙 ・ コ ン テ	31.5× 19.8	〃
63	〃	デ ッ サ ン(裸婦)	明治40	〃	34.3× 22.3	〃
64	〃	デ ッ サ ン(裸婦)	昭和40	〃	21.6× 33.8	〃
65	〃	デ ッ ッ サ ン(裸婦)	明治40	〃	32.1× 21.8	〃
66	〃	デ ッ サ ン(裸婦)	明治40	〃	31.7× 21.0	〃
67	〃	デ ッ サ ン(裸婦)	昭和12	紙 ・ 鉛 筆	28.3× 23.7	〃
68	〃	デ ッ サ ン(裸婦)	昭和12	〃	28.0× 23.7	〃
69	〃	デ ッ サ ン(少女)	昭和12	〃	29.2× 19.3	〃
70	〃	デッサン(少女のいる風景)	昭和18	紙 ・ 色 鉛 筆	20.8× 30.7	〃
71	〃	デッサン(人形を持つ少女)	不詳	紙 ・ 鉛筆着彩	21.7× 14.0	〃
72	白 竜 幾 之 助	エ ジ プ ト	大正11	紙 ・ 水 彩	23.0× 31.8	〃
73	〃	伊 国 ア シ シ	大正12	〃	24.9× 33.9	〃
74	〃	伊 国 ナ ポ リ	大正12	〃	36.2× 26.5	〃
75	〃	海	不詳	〃	24.3× 34.4	〃

番号	作家名	作品名	制作年	材質・形状	寸法	受入方法
76	白滝幾之助	テムス河	昭和28	キャンバス・油彩	32.8×44.8	購入
77	〃	鶯	不詳	〃	37.8×45.2	〃
78	桜井忠剛	バ　　ラ	不詳	〃	23.6×32.9	〃
79	小川千甕	港	不詳	〃	32.3×44.8	〃
80	榊原一広	収　　穫	大正7	〃	45.5×60.6	〃
81	田中善之助	パ　リ　の　女	大正10	〃	60.6×50.0	〃
82	〃	聖護院の裏	明治40頃	紙　・　水彩	24.2×35.3	〃
83	加藤源之助	秋の山(大和初瀬村)	明治44	〃	47.5×31.1	寄　贈
84	中林　　僊	山中湖附近	不詳	〃	34.0×49.5	〃
85	〃	冬の風景	不詳	〃	25.2×33.0	〃
86	〃	鳥　　居	不詳	紙　・　淡彩	26.5×37.1	〃
87	〃	風　　景	不詳	紙　・　鉛筆	26.5×37.2	〃
88	〃	保津川上流	不詳	紙　・　淡彩	26.5×37.0	〃
89	〃	け　し　の　花	不詳	紙　・　水彩	50.0×34.0	〃
90	長谷川良雄	晩　　秋	明治42	〃	28.0×39.3	〃
91	〃	高等工芸学校西裏通り	明治40	〃	24.4×34.8	〃
92	〃	下　　鴨	大正4	〃	35.4×25.6	〃
93	榊原一広	南　仏　風　景	大正12頃	キャンバス・油彩	53.0×65.0	〃
94	田中志奈子	デッサン(棒をもつ裸体)	明治38	紙　・　鉛筆	62.7×47.1	〃
95	〃	デ　ッ　サ　ン(裸体)	明治38	〃	62.9×47.7	〃
96	〃	デ　ッ　サ　ン(神官)	明治38	〃	63.4×48.0	〃
97	〃	デ　ッ　サ　ン(大原女)	明治38	〃	63.0×48.1	〃
98	〃	デッサン(箒をもつ女)	明治38	〃	62.7×48.3	〃
99	〃	デ　ッ　サ　ン(裸婦)	明治39	〃	62.6×47.8	〃
100	澤部清五郎	桜	不詳	キャンバス・油彩	66.9×39.2	〃
101	田中善之助	山　　門	不詳	紙　・　水彩	42.3×32.1	購入
102	〃	高　　台　　寺	明治39	紙　・　鉛筆	42.2×34.3	〃
103	〃	出　　町	明治39	〃	42.2×31.0	〃
104	小笠原豊涯	中井八重子像	明治30	板　・　油彩	46.5×33.5	〃
105	ギュスターヴ・クールベ	雪の中の小鹿	明治2頃	キャンバス・油彩	51.5×61.5	保管換
106	安井曾太郎	熱海附近	昭和4	〃	65.2×53.0	〃
107	浅井　　忠	フォンテンブローの森	明治34	紙　・　水彩	35.0×24.3	〃
108	中西利雄	曇りの日の離宮と駅	昭和22	〃	55.0×74.5	〃
109	〃	四人の女	昭和14	〃	73.0×100.0	〃
110	石井柏亭	舞　　姫	昭和28	〃	49.0×32.0	〃
111	〃	聖フランチェスコ寺院	大正12	キャンバス・油彩	60.0×73.0	〃
112	〃	舟に居る人	大正2	紙　・　水彩	36.5×26.0	〃
113	〃	老　　太　　々	大正8	キャンバス・油彩	65.5×35.5	〃
114	〃	病　　児	明治37	紙　・　水彩	34.0×25.5	〃
115	小堀　　進	逆　　光	昭和49	〃	66.2×101.2	〃
116	〃	海　(白　浜)	昭和29	〃	65.7×99.8	〃
117	〃	霞　　ヶ　　浦	昭和48	〃	83.0×120.5	〃
118	〃	山	昭和40	〃	85.8×123.0	〃
119	〃	南　欧　の　丘	昭和37	〃	97.3×145.4	〃
120	〃	冬　晴　の　果　樹　園	昭和11	〃	52.5×65.1	〃

工 芸

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	信 田 洋	透 首 瓶		彫 金	21.3× 20.7	購 入
2	〃	装 瓶(六文銭)	昭和45	〃	37.0× 17.0	〃
3	〃	黄 銅 花 い ら ず	昭和36	〃	54.3× 24.2	寄 贈
4	〃	装 瓶(樓)	昭和41	〃	39.8× 23.7	〃
5	〃	黒 孔 雀 の 瓶	昭和42	〃	35.2× 39.0	〃
6	〃	透 壺	昭和43	〃	44.0× 21.5	〃
7	〃	銀 壺(花ひらく)	昭和44	〃	18.1× 25.9	〃
8	〃	帯 装 瓶	昭和46	〃	35.0× 19.3	〃
9	〃	立 姿 瓶	昭和47	〃	39.7× 16.5	〃
10	〃	赤 銅 張 小 筥	昭和48	〃	6.7×8.6×16.9	〃
11	〃	赤 銅 壺(作品73番)	昭和50	〃	25.9× 32.0	〃
12	〃	銀 瓶(スクラム)	昭和51	〃	36.5× 16.0	〃
13	〃	乳 装 銀 瓶	昭和52	〃	31.8× 14.8	〃
14	〃	銀 瓶(マーキュリー)	昭和53	〃	39.5× 20.0	〃
15	〃	金 彩 壺	昭和54	〃	25.8× 21.0	〃
16	〃	金 冠 銅 瓶	昭和55	〃	24.7× 22.5	〃
17	飯 田 美 郎	緑 陰	昭和51	彫 金・額 装	85.6× 73.3	購 入

書

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	浅 見 錦 龍	蘭 亭 序	昭和56	紙・墨書・六曲屏風	136.0×300.0	寄 贈

版 画

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	池 田 良 二	Nobody knows my mind	昭和56	紙 ・ 銅 版	59.0× 89.0	購 入
2	〃	Martin	昭和54	〃	79.5× 56.5	〃
3	〃	Scattered seeds	昭和54	〃	79.5× 56.5	〃
4	〃	Lack	昭和55	〃	58.0× 91.0	〃
5	〃	Tristeza	昭和55	〃	54.2× 89.0	〃
6	〃	Leaves	昭和55	〃	45.2× 25.8	寄 贈
7	〃	Varanasi	昭和55	〃	53.9× 26.2	〃
8	〃	Together again	昭和54	〃	56.5× 26.5	〃

研究資料

資 料 名

番号	資 料 名	差出年月日	宛 先	備 考
1	浅井忠書簡・葉書	明33. 3. 14	浅 井 達 三	部分 封筒なし
2	〃	明35. 10. 31	浅 井 安 子	巴里より 封筒付
3	〃	明36. 2. 11	小 林 万 古	封筒付 京都市上京区仲町丸太町上ルより
4	〃	明39. 6. 30	浅 井 達 三	封筒付 聖護院より
5	〃	明40. 1. 2	浅 井 安 子	封筒付 須磨より
6	〃	明40. 6. 3	浅 井 達 三	封筒付 信重院より
7	〃	明40. 7. 31	浅 井 達 三	封筒付 信重院より
8	〃	明40. 8. 27	浅 井 安 子	絵入寄書 封筒は、明治35. 12. 30のもので書簡とは別のもの
9	〃	不詳. 1. 7	浅 井 家 皆 々	部分 封筒なし

番号	資 料 名	差出年月日	宛 先	備 考
10	浅井忠書簡・葉書	不詳. 7. 27	福井 松雄	封筒付 宛名のみ
11	〃	不詳. 5. 7	岡本 橘仙	封筒付 宛名のみ 聖護院より
12	〃	不詳. 7. 23	中沢 岩太	封筒付 宛名のみ
13	〃	不 詳	浅井 の母	封筒なし 部分 宛先は達三の可能性あり
14	〃	明38. 7. 21	浅井 安子	絵はがき 中津川より
15	〃	明39. 12. 29	浅井 安子	はがき 須磨より 切手切取り

番号	資 料 名	差出年月日	宛 先	差 出 人	備 考
16	浅井忠関係葉書	明33. 10. 5	浅井 忠	中川八郎・吉田博	ボンペイ絵はがき
17	〃	明34. 8. 17	浅井 忠	田 中 半 七	動物版画
18	〃	明34. 9. 4	浅井 忠	不 詳	アントワープ絵はがき
19	〃	明34. 10. 11	浅井 忠	(龍)和 亭	ボンペイ絵はがき
20	〃	明35. 5. 4	浅井 忠	田 中 半 七	写真はがき
21	〃	明38. 2. 11	浅井 忠	水 落 露 石	非美術画報自殺の図
22	〃	明39.	浅井 忠	河 合 辰 太 郎	年賀
23	〃	明39.	浅井 忠	小 山 源 治	年賀
24	〃	明39.	浅井 忠	不 詳	年賀
25	〃	明39.	浅井 忠	大 村 西 崖	年賀
26	〃	明40.	浅井 忠	高 村 真 夫	年賀
27	〃	明40.	浅井 忠	田 中 金 次 郎	年賀
28	〃	明40.	浅井 忠	水 落 露 石	年賀
29	〃	明40.	関西美術院	牧野克次・霜鳥他	年賀
30	〃	明40.	浅井 忠	石 井 満 吉(柏亭)	年賀
31	〃	明40.	浅井 忠	濱 口 莊 口	年賀
32	〃	明40.	浅井 忠	田 村 芳 太 郎	年賀
33	〃	明41. 3. 25	浅井 達三	池 辺 義 象	浅井忠作「大津絵・奴」
34	〃	明41. 5. 10	浅井 安子	黙 語 会	浅井忠作「馬上の農夫」
35	〃	明41. 5. 10	浅井 達三	黙 語 会	同 上
36	〃	明41. 5. 10	浅井 達三	不 詳	浅井忠作「高瀬川曳船図」
37	〃	明34. 8. 17	浅井 忠	田 中 半 七	鶴の浮出し
38	〃	大2.	浅井 忠	小 川 千 襲	年賀
39	〃	不詳. 11. 1	浅井 忠	池 辺 義 象(?)	ボンペイより 大理石像写真

番号	資 料 名	備 考
40	浅井忠絵はがき	1 枚 印刷物 未使用
41	浅井忠先生遺筆羅漢図絵葉書	国華社発行 5 枚 木瓶色摺

番号	資 料 名	差出年月日	宛 先	備 考
42	空封筒(書簡なし)	明36. 3. 16	浅井 安子	上根岸より
43	〃	明36. 7. 21	浅井 安子	奈良より
44	〃	明36. 12. 25	浅井 安子	東京, 神田連雀町佐々木旅館より
45	〃	明38. 8. 7	浅井 忠	本人が本人宛 連雀佐々木旅館より 安子不在の為か?
46	〃	明38. 8. 15	浅井 安子	聖護院より
47	〃	明40. 11. 19	浅井 安子	連雀・佐々木旅館より
48	〃	不 詳	弘文館 相 沢	宛名のみ

施 設

この建物は、幾つかの建設候補地の中から、千葉港に隣接した臨海埋立地の一角に計画された。計画着手当時はこの付近は訪れる人も少なく、海を通して石油基地のタンク群や工場と煙を吐き出す煙突が望める環境であった。

このような当初の環境下で、空気汚染、降下媒塵そして塩害など、建物に与える悪影響が予測されるために、材料の選択、構法、空調計画等は十分な検討がなされた。以下、主な部分について記す。

外壁の打込みタイル—先積ブリック構法

従来の外壁をコンクリートで表現している建物とは異なり、炔器質タイルを型枠代にしてコンクリートと一体に打ち込む構法をもちいた。

今回使用したタイルは従来の断面と異なり、コの字型の断面をしており、型枠にセットせずモルタルにて積上げられるように見込み寸法を5cmの厚味にしてある。

施工方法は、内型枠、配筋工程の次のタイルを積み5段毎に型枠のホームタイを通し、2.400mm程度まで積み上げ単管にて固定する。この2.400mmの高さは、設計段階での試作実験にて安全を確認した数値である。試作段階での支保工は、縦方向に角材を400ピッチに通し、横方向に単管を480ピッチに通し固定したが、施工時は、縦方向に単管を480ピッチに通して固定した。コンクリートの打設は、1.5m～2.0m/hの速度を目標に行ない、ポンプにて打設可能な程度までスランブを下げた。この工程を繰返しタイル壁面を構成してゆく。

タイル面の施工時の汚れ防止には、ふのりを塗布した。タイルの目地は積み上げる工程で仕上げられ、表面に現れない目地の空隙にコンクリートのノロがしみ込んでゆき、目地からの滲透水を防ぎ満足する状態に仕上がった。

屋根の天然スレート

前述のような環境のもとで、勾配屋根に適し、十分にもちこたえられる材料としては耐候性鋼等が考えられたが調査の結果により天然スートをを使用した。

空 調 計 画

計画当初より、良好とはいえない外部環境から美術品をいかに保護するかが、海浜に建つ美術館として、ひとつの重要なテーマだった。外気取入れは、内部に自動巻取りフィルター、ユニット型フィルター、活性炭フィルター、キャピラリーワッシャーの4種類の空気清浄フィルターを組込んだ外気処理器を通して供給

されている。

展示棟はCAV（定風量型）+VAV（可変風量型）方式により計画されている。わが国の美術館は、平常の館内利用者に対して特別展や団体展等のときに非常に利用者がふえて、発熱負荷の変動が大きくなる。VAV方式は、こういった条件に対して非常に効果的であるといえる。

管理棟は、エネルギーの省力化にも役立つVAV方式を採用し、収蔵庫は、露点再熱制御方式により二つの条件の異なる収蔵庫を2台の空調機で空調されている。

照 明 計 画

展示壁面は、自然光源と人工光源とにより全体計画されている。

自然光源は展示室の高窓から取り入れられ、外部の溝型ガラスと内部の紫外線吸収のアクリル拡散板を経て壁面に達する。しかし、太陽直射光の鉛直面照度は8時から15時の間で10%の時間が80.000lx以上、30%の時間が50.000lx以上、50%の時間が25.000lx（平均）以上、90%の時間が5.000lx以上という測定値がありまた水平面照度にしても50.000lx（薄晴）から5.000lx（曇天）の範囲と非常に明るい。このように必要以上に明るい光源は、調光通路内に設けられた2板の電動スクリーン（これは、計算値により鉛直面照度60.000lx以上の条件のとき必要な枚数で、それぞれ異なった透過率を有する布を使用した）にて基準の壁面照度になるよう調光される。

計算値による透過率をもつクロスでの何回かの現場実験の結果、クロスは白地のポリエステル（透過率53.6%）と黒地のジョーゼット（透過率35%）の2枚を採用した。ここで留意すべき点は、クロスの遮光性能を良くするために、厚地の布や、コーティングされた布を使用すると壁面に色がつくことがある。壁面の照度分布の状態は、視覚的に均一な壁面が確保できた。

曇天・雨天に対しては、蛍光灯と白熱灯を補助照明として設置した。蛍光灯と白熱灯を併用したのは、演色性を高めるためである。

第1、2展示室は、すべて蛍光灯と白熱灯による人工光源で計画されている。壁面照度は、最高200lxに押えてある。

固定ケースは基準照度を180lxに設定した。照明方法は、全面アルミルーバーの天井ふところに蛍光灯を2本並列させ、その間に白熱灯2個を配置した。

【設計監理者】

建築：大高建築設計事務所

構造：木村俊彦構造設計事務所

設備：科学応用冷暖研究所

備品：大高建築設計事務所

【施行者】

建築：(株)竹中工務店

設備：空調＝東洋熱工業(株)，衛生＝第一管工事(株)，
電気＝関東電気工事(株)

備品：天童木工，山口木材，佐々木ブラインド

【設計期間】

基本設計：昭和46年11月～昭和47年1月

実施設計：1期展示棟＝昭和47年7月～昭和48年1月

2期管理棟＝昭和48年7月～昭和48年11月

3期県民アトリエ棟＝昭和53年9月～
昭和54年11月

【施工期間】

1期展示棟：昭和48年4月～昭和49年3月

2期管理棟：昭和50年4月～昭和51年2月

3期県民アトリエ棟：昭和54年3月～昭和55年2月

【階数】

地下1階，地上2階，塔屋1階建

【高さ】

基礎底まで：GL－5.00m，最高軒高GL＋9.33，最高高さ：GL＋15.20m

【都市計画地域指定】

用途地域：準工業地域

【規模・面積】

敷地面積：33,057.87㎡，建築面積：7,641.9㎡，建
ぺい率：23.11%，延床面積：8,970.85㎡，展示棟＝
5,194.59㎡，管理棟＝2,274.60㎡，県民アトリエ棟
＝1,501.66㎡，駐車台数：101台

【構造】

主体構造：鉄筋コンクリート造（プレストレスト導
入），屋根：鉄骨造／主鋼材の種類：H型，山型，平
鋼＝SS41および高張力鋼，PC鋼棒／コンクリ
ートの種類：A種・普通コンクリート（基礎・地中梁
・1階スラブ） $F_c=210\text{kg}/\text{cm}^2$ ，B種・軽量コンクリ
ート（梁・スラブ用・地上部） $F_c=300\text{kg}/\text{cm}^2$ ，C種
・軽量コンクリート（地上部躯体でA，B以外の梁
・壁など） $F_c=240\text{kg}/\text{cm}^2$

【外部仕上】

屋根：勾配屋根＝アスファルトルーフィング・コロ
シート，天然スレート3枚葺，陸屋根＝アスファル
ト防水，押えコンクリート，豆砂利打込み

外壁：珪酸質タイル（先積ブリック打込工法）一部
コンクリート打放しおよび珪り仕上げに撥水剤塗布
開口部：昭和鋼機(株)オーダーメイド自然発色サッ
シュ，一部型鋼グラファイト処理サッシュ，旭硝子
スーパーサンゴールド

【内部仕上げ】

玄関ホール・ロビー・第7展示室：床・巾木＝自然

石（北木島御影）円盤摺および本磨，壁＝コンクリ
ート砕り仕上げ，プラスター中塗り地塗装仕上げ，
天井＝岩綿吸音板 天井高＝2,300 4,200～13,500

展示室：床＝ビニールホモジニアスタイル，壁＝石
綿珪酸カルシウム，板下地クロス張り，塗装仕上げ
天井＝岩綿吸音板，塗装仕上げ 天井高＝3,600

3,240 4,500～6,100

事務室：床＝ビニールホモジニアスタイルおよびビ
ニールアスベストタイル，壁＝プラスター中塗り地
塗装仕上げ，天井＝岩綿吸音板塗装仕上げ，天井高
3,400

収蔵庫：床＝フローリングブロック，壁・天井＝米
杉 天井高＝3.400 館長・副館長室・応接室：＝じ
ゅうたん，壁＝突板練付け，天井＝岩綿吸音板 天
井高＝2,600

講堂：床＝置敷カーペット，一部マコレフローリン
グ，壁＝マコレ練付け，及びクロス張り，天井＝クロ
ス張り

ホール：床＝ビニールホモジニアスタイル

廊下：壁＝プラスター中塗り地塗装仕上げ

情報資料室：天井岩綿吸音板

事務室：床＝ビニールアスベストタイル，壁＝プラ
スター中塗り地塗装仕上げ，天井＝軟質石綿板

第1・第2アトリエ：床＝ビニールアスベストタイル，
壁＝コンクリート打放し下地補修の上塗装仕上
げ，天井＝軟質石綿板

研修室：床＝ビニールアスベストタイル，壁＝クロ
ス張り，天井＝岩綿吸音板

和室：床＝玄晶石水磨き，タタミ，檜家甲板，壁＝
京じゅうらく塗，天井：杉鉋ベニヤ目透シ，竿縁天井

【昇降機設備】

荷物用エレベーター（三菱エレベーター）：制御方
式＝交流2段速度歯車式，セレクトィブコレクティ
ブ(DWA)F操作方式，規模：積載重量3,000kg，カゴ
内法＝3,000×3,000×3,000，速度＝30m/min，戸閉
型式＝電動式2板戸上下開き

【空調設備】

空調方式：展示棟＝CAV（定風量型）＋VAV（可
変風量型）方式；県民アトリエ＝各室ハンドリン
グ方式，管理棟＝VAV方式，保管庫＝露点再熱制御
方式

熱源：空気熱源スクリュウ熱回収ヒートポンプ方式

【衛生設備】

給水：ポンプ圧送方式，引込み管径75mm

排水：汚水・雑排水合流方式系統（管径300），雨水
系統（管径300）別，公設本管へ放流

【電気設備】

受電方式：交流 3相3線式6,000V 50Hz，電灯幹
線＝交流 単相3線式200V/100V 50Hz，分岐支流

＝单相2線式200V/100V 50Hz, 分力幹線および
分岐支流＝交流 3相3線式200V 50Hz, 電話交
換方式：40回線クロスバー完全共通制御分散中継方
式, 契約容量：630Kw

【防災設備】

排煙方式：自然排煙, 機械排煙（第1,2,7展示室）
消火方式：屋外・屋内消火栓, 不燃性ガス消火設備
ハロゲン1301（電気室, 機械室, 収蔵庫1,2）
自家発電：ディーゼル機関直結交流発電機, 定格出
力100kVA

【その他の設備】

防犯設備：ITVカメラ設備, 防犯警報装置, 調光放
送設備, 火災報知設備

工期及建設経費

第1期工事（展示棟）

工期 昭和47年9月20日～昭和49年3月31日

工事費 775,967千円

本 体 工 事	425,230千円
電 気 設 備 工 事	79,663千円
空 調 設 備 工 事	166,493千円
給排水衛生設備工事	28,995千円
外 構 工 事	67,705千円
ガ ス 工 事	7,881千円

第2期工事（管理棟）

工期 昭和50年3月1日～昭和51年2月20日

工事費 453,800千円

本 体 工 事	305,500千円
電 気 設 備 工 事	30,000千円
空 調 設 備 工 事	79,000千円
給排水衛生設備工事	19,514千円
外 構 工 事	17,786千円

第3期工事（県民アトリエ棟）

工期 昭和54年3月22日～昭和55年3月31日

工事費 370,000千円

本 体 工 事	248,758千円
基 礎 杭 打 工 事	16,542千円
空 調 設 備 工 事	56,200千円
電 気 設 備 工 事	35,000千円
給排水衛生設備工事	13,500千円

第4期工事

工期 昭和55年12月25日～昭和56年3月24日

工事費 8,000千円

外構工事	7,800千円
植栽工事	200千円

展 示 棟

玄関ホール	102.40 m ²	厨 房	36.00 m ²	工 作 室	31.00 m ²
ク ロ ー ク	91.80 m ²	従業員控室等	17.28 m ²	発 電 機 室	25.00 m ²
倉 庫 A	2.70 m ²	食 堂 ホール	61.20 m ²	電 気 室	123.20 m ²
〃 B	2.70 m ²	ロ ビ ー	335.52 m ²	ポ ン プ 室	76.80 m ²
第一展示室	437.76 m ²	第一休憩室	23.04 m ²	機 械 室	305.20 m ²
〃 二 〃	400.32 m ²	〃 二 〃	23.04 m ²	高架水槽室	11.46 m ²
〃 三 〃	469.08 m ²	〃 三 〃	23.04 m ²	E. V機械室	27.28 m ²
〃 四 〃	403.20 m ²	便 所 A	30.24 m ²	E. V廻り	54.56 m ²
〃 五 〃	824.19 m ²	〃 B	23.76 m ²	ダクトスペース	35.68 m ²
〃 六 〃	330.58 m ²	身障者用便所	7.92 m ²	廊 下 等	123.48 m ²
〃 七 〃	566.56 m ²	コントロール室	20.16 m ²		
食 堂	119.52 m ²	フィルター室	28.92 m ²	合 計	5,194.59 m ²



管 理 棟

(1階)

第2会議室	22.62	m ²
更衣室	14.83	m ²
医務室	21.18	m ²
文書庫	22.02	m ²
警備員室	43.59	m ²
第一会議室	20.15	m ²
倉庫	7.19	m ²
湯沸室	5.19	m ²
便所	24.54	m ²
宿直室	34.20	m ²
物置	9.92	m ²
用務員室	31.83	m ²
審査室・資料準備室・荷解室	520.68	m ²
消毒室	31.79	m ²
資料倉庫	124.25	m ²
荷解梱包保管室	52.67	m ²
荷扱人控室	21.94	m ²
機械室	51.74	m ²
廊下等	123.52	m ²
小計	1,183.85	m ²

(2階)

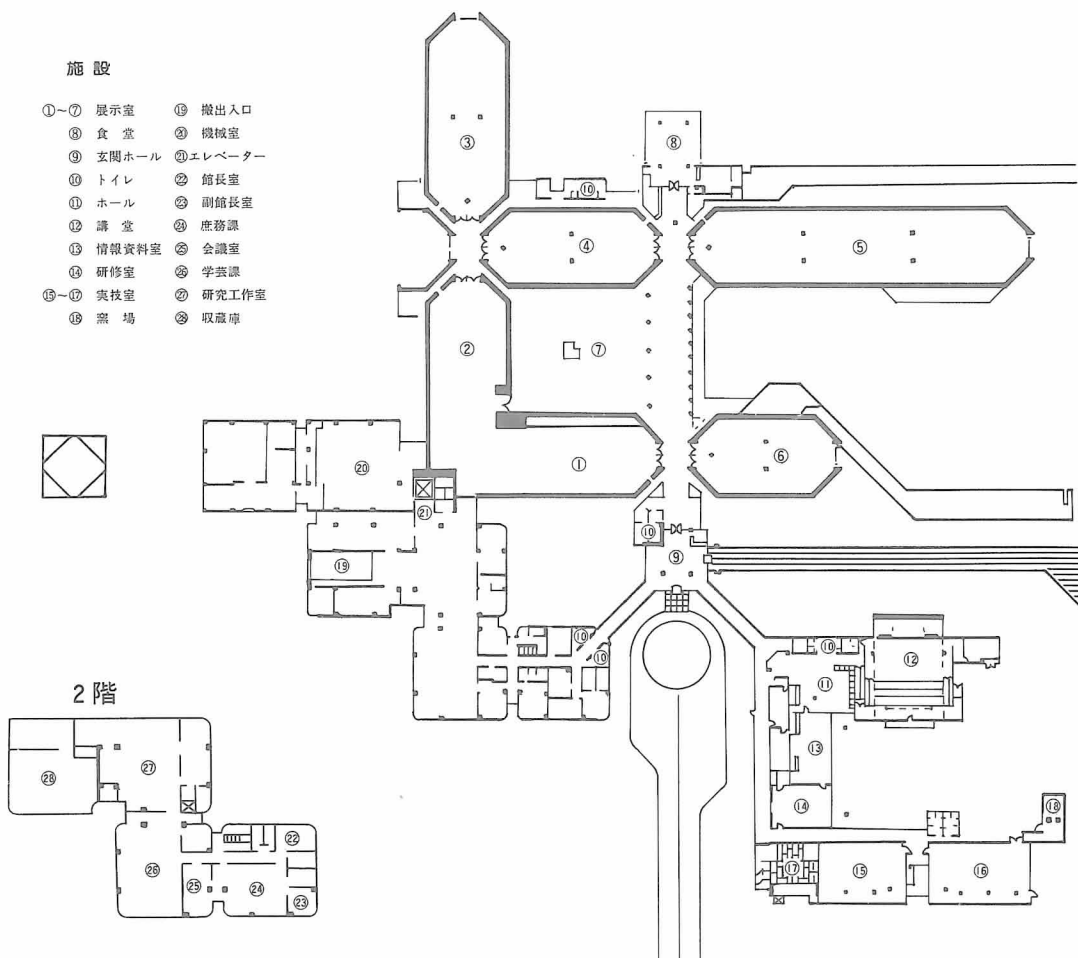
館長室	33.27	m ²
副館長室	23.42	m ²
第一応接室	14.67	m ²
第二応接室	14.55	m ²
庶務課室	112.34	m ²
会議室	43.84	m ²
学芸課室	195.32	m ²
学芸相談室	23.91	m ²
研究工作室	216.49	m ²
写真スタジオ	54.30	m ²
器材室	6.74	m ²
暗室	12.19	m ²
第一収蔵庫	184.40	m ²
〃 二 〃	42.81	m ²
E.V前室	16.39	m ²
便所	21.50	m ²
湯沸室 A	3.24	m ²
〃 B	6.87	m ²
廊下等	60.94	m ²
ダクトスペース	3.56	m ²
その他		
小計	1,090.75	m ²
合計	2,274.60	m ²

県民アトリエ

1 F 機械室	25.92	m ²
講堂倉庫	8.64	m ²
講堂	259.24	m ²
コントロール室	30.33	m ²
ホール側便所	29.97	m ²
情報資料室	172.77	m ²
同上倉庫	4.70	m ²
事務室	22.76	m ²
研修室	74.70	m ²
同上倉庫	4.23	m ²
第1アトリエ	155.70	m ²
第2アトリエ	184.31	m ²
第3アトリエ	95.47	m ²
アトリエ側便所	20.77	m ²
荷解室	25.65	m ²
窯場	27.17	m ²
同上倉庫	6.66	m ²
ホールその他	352.67	m ²
小計	1,501.66	m ²
合計	8,970.85	m ²

施設

- ①～⑦ 展示室
- ⑧ 食堂
- ⑨ 玄関ホール
- ⑩ トイレ
- ⑪ ホール
- ⑫ 講堂
- ⑬ 情報資料室
- ⑭ 研修室
- ⑮～⑰ 実技室
- ⑱ 窯場
- ⑲ 搬出入口
- ⑳ 機械室
- ㉑ エレベーター
- ㉒ 館長室
- ㉓ 副館長室
- ㉔ 庶務課
- ㉕ 会議室
- ㉖ 学芸課
- ㉗ 研究工作室
- ㉘ 収蔵庫



事業報告

1. “みる” 事業について

特別展として、秋に「肉筆浮世絵展」を行い、県内に残る著名な浮世絵の絵馬をはじめ、近年海外から里帰りしたものなど、初公開の作品も含め数多くの作品や資料を展示紹介した。また、年末から新春にかけて「浅井忠と京都洋画壇の人々」展として、浅井の京都時代の作品を中心に、浅井と共に活躍した京都洋画壇の先覚者たち、更に聖護院洋画研究所、関西美術院で学んだ人々の作品を展観し、浅井が京都洋画壇に与えた功績を再考した。

企画展では、「金工芸・信田洋回顧展」を催し、彫金の魅力を探り理解を深めた。続いて、房総の美術家シリーズ(11)として、浅井忠の甥にあたり、千葉県美術会設立に貢献した洋画家「浅井真展」を、更に各美術団体が中央において開催した団体展の受賞作品を展示した「第15回現代美術選抜展」を行った。千葉県移動美術館は、八日市場市中央公民館と流山市郷土資料館で開設し、地域の人々に鑑賞の機会を供した。常設展は、本館所蔵の作品を二期に分けて行った。

2. “かたる・つくる” 事業について

かたる事業として、美術講演会を2回、美術を語る会を5回開催した。また、美術館夏季大学は、近代日本洋画の形成に大きな影響を与えた浅井・黒田の活躍ぶりや、近代日本画の推移・展開に焦点をあて開催した。

一方、“つくる” 事業としては、「デッサン入門」「洋画入門」「洋画研修」「日本画入門」「彫塑入門」「てん刻入門」「七宝焼入門」「陶芸入門」「書芸入門」「書芸研修」「版画入門」の各実技講座を開講した。

3. 資料収集について

美術資料は、収集方針に基づき、千葉県美術品取得基金等活用し、より調和ある収集をはかった。

常 設 展

常 設 収 蔵 作 品 展

会 期 昭和56年 4月18日～9月 6日

展示点数 33点

入館者数 52,463人

常設展は、随時展示替えを行いながら本館収蔵作品を広く公開している。特に本館では、近代以降の房総ゆかりの美術家を中心に調査・研究をすすめ、併せて作品の収集・展示につとめている。これまで開催した常設展の中で、これら美術家の紹介と顕彰を行ってきたが、本年度前期の常設展は、基金で購入した作品を含め、新収蔵作品を中心に展観した。また、資料コーナーを設け、浅井忠の業績の一端を時代を追って紹介した。

出 品 目 録

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
〈日本画〉		鶴 田 吾 郎	小 鳥 た ち
鶴 田 熙	夕 曠	〃	杣 夫
〈洋 画〉		板 倉 鼎	静 物
浅 井 忠	フォンテンブローの風景	〃	金 魚
安 井 曾 太 郎	熱 海 附 近	熊 谷 文 利	佳 境 に 入 る 女 祈 禱 師
ク ー ル ベ	雪 の 中 の 小 鹿	松 澤 茂 雄	海 辺 の 裸 婦
石 井 柏 亭	聖 フ ラ ン チ ェ ス コ 寺 院	高 橋 規 矩 治 郎	漁 船
〃	老 太 々	久 保 木 彦	鉄 路 の 信 号 ボ ッ ク ス
〃	舟 に 居 る 人	小 堀 進	南 欧 の 丘
〃	病 児	〃	山
中 西 利 雄	外 房 風 景	〃	霞 ケ 浦
〃	四 人 の 女	〃	花 と 海
〃	曇 り 日 の 離 宮 と 駅	〈版 画〉	
鶴 田 吾 郎	蒙 古 の 女	星 裏 一	枯 草 の 風 景 (B)
〃	朝 日 連 峰	〃	大 樹
〃	谷 川 岳	〃	大 星 の 森 (大)
〃	山 神	〃	枝 繁 る (赤)
〃	お 山 の 鈴 音	〃	青 い 一 列

常 設 収 蔵 作 品 展

会 期 昭和57年 1 月22日～3 月31日

展示点数 76点

入館者数 28,545人

本館では、近代以降の房総ゆかりの美術家を中心に調査・研究をすすめ、併せて作品の収集・展示につとめている。これまで開催した常設展の中で、これら美術家の紹介と顕彰を行ってきた。本年度後期の常設展は、引き続き新収蔵作品を紹介し、また、千葉県ゆかりの作家の作品紹介としては、日本画を中心に彫塑・工芸・版画の作品や浅井忠とその周辺作家の作品の紹介等、いくつかの観点にたってコーナーを設け、随時展示替えを行いながら展観した。

出 品 目 録

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
〈日本画〉			
東 山 魁 夷	春	鶴 田 吾 郎	自 画
加 倉 井 和 夫	穀	〃	海 出
吉 岡 堅 二		〃	買 出 し の
〃	馬 濤	〈寄託品〉	
松 尾 敏 男	原 夜	梅 原 龍 三 郎	北 京 秋
渡 辺 学	明	〃	姑
〃	川 口	〈彫 塑〉	
杉 原 元 人	海 花	鈴 木 実 子	存 在 す る 私
関 主 税 人	澗 太	鈴 木 啓 子	Feeling '69
酒 井 亜 人	メ ス テ ィ ー ソ の 女	郡 司 和 男	詩 人 の 肖 像
高 畑 郁 子	山 門 雨	綿 引 司 郎	遙
後 藤 純 男	波 上 海 女	〈工 芸〉	
若 木 山	海	香 取 秀 具	靈 獣 文 大 花 瓶
〃		〃	鳳 凰 文 様 花 瓶
篠 崎 之 男	瀧 の	〃	鳩 香
秋 葉 長 生	西 関 う	香 取 正 彦	龍 銀 玉 錯 花 瓶
岩 崎 巴 人	漁 遠	津 田 信 夫	鑄 銅 水 盤
小 野 具 定	く な っ た	〃	鳳 翔 薫 炉
〃	群	〃	象 嵌 磁 鉢
富 取 風 堂		宮 之 原 謙	釉 彩 両 耳 花 瓶
〈洋 画〉		土 肥 刀 泉	条 紋 金 彩 花 瓶
浅 井 忠	沢 入	鈴 木 治 平	
〃	農 老	〈版 画〉	
〃	母	浜 口 陽 三	ピ ー マ ン の あ る 静 物
霜 鳥 之 彦	シ ア の	〃	26 の サ ク ラ ン ボ
石 井 柏 亭	州 風	〃	遺 伝(影)
黒 田 重 太 郎	丘 上 の 鐘	〃	遺 伝(流れ)
大 久 保 作 次 郎	ア ン ド レ 裸 体	〃	女 扉 と 訪 門 帝 者
椿 貞 雄	薬 を 飲 む 女 祈 禱 師	池 田 満 寿 夫	飾 り 窓 の 中
熊 谷 文 利	放 蕩 息 子 の 帰 宅	〃	ス フ ィ ン ク ス
笹 岡 了 一	逆 セ ー ヌ	瑛 九	家 か 顔
小 堀 進	高 口	〃	よ ろ こ び
〃	ン ド ン の	〃	Nobody knows my mind
〃	白 い	〃	Scattered seeds
不 破 章	浴 谷	〃	Tristeza
〃	水 婦	〃	Martin
鶴 田 吾 郎	川 温		
〃	人		
〃			

特 別 展

— 庶民芸術の華 —

肉筆浮世絵展

会 期 昭和56年 9月12日～10月14日

展示点数 60点

入館者数 36,459人

浮世絵は、近世初頭大衆の生活を取り上げた風俗画に起源を求めることができる。発生の当初においては、肉筆浮世絵が本流をなしていたが、やがて錦絵という多色刷の版画技術が完成するとともに地位を逆転させ、今日浮世絵という時には、版画をさすかのようになった。

しかし、肉筆浮世絵の流れは、錦絵の時代になっても続いていたことはいうまでもなく、近年とみに再評価の気運が高まっている。

ひるがえって本県は、浮世絵の始祖と目されている菱川師宣の生誕地であることをはじめ、喜多川歌麿、葛飾北斎、溪斎英泉、歌川広重など、著名な浮世絵師とかかわりが深い。

肉筆浮世絵は、版画に比べ現存する作品も極めて少なく、研究も十分な段階に至っているとはいえない現状であり、ここに、県内に残る著名な浮世絵の絵馬をはじめ、近年海外から里帰りしたものなど、初公開の作品も含め数多く一堂に展示紹介し、改めて肉筆浮世絵の意義を概観してみることにした。



出 品 目 録

作 品 名	作 家 名	作 品 名	作 家 名
き せ る 持 つ 美 人	無 款 ・ 寛 永	雪 庭 美 人 読 書 図	川 又 常 正
邸 内 遊 楽 図	無 款 ・ 寛 永	汐 く み	川 又 常 正
若 衆 遊 楽 図	無 款 ・ 寛 文	虫 聞 く 遊 女 と 禿	奥 村 政 信
立 美 人	無 款 ・ 寛 文	花 魁 と 禿	磯 田 湖 竜 斎
寝そべる美人(半井ト養賛)	無 款 ・ 寛 文	鏡 み る 美 人	無 款 ・ 伝 東 燕 斎 寛 志
美 人 舞 踊 図	無 款 ・ 寛 文	浮 絵 室 内 遊 興 図	無 款 ・ 宝 暦 頃
桜 下 遊 宴 図	菱 川 師 宣	浮 絵 楼 上 遊 興 図	無 款 ・ 明 和 頃
三 美 人 お ど り 図	菱 川 師 宣	く つ ろ ぐ 二 美 人	勝 川 春 章
放 下 師 図	菱 川 師 宣	真 崎 の 図 (鳥 亭 焉 馬 賛)	勝 川 春 亭
炬 燵 を 囲 む 男 女	無 款 ・ 菱 川 派	浅 妻 舟	高 嵩 谷 之
美 人 観 月 図	無 款 ・ 菱 川 派	扇 書 く 美 人	細 田 栄 朝
立 美 人	懷 月 堂 度 繁	松 風 村 雨 図	水 野 蘆 春
立 美 人	無 款 ・ 懷 月 堂 派	提 燈 も つ 美 人	歌 川 豊 国
美 人 立 姿	無 款 ・ 懷 月 堂 派	桜 下 花 魁 と 禿	歌 川 豊 国
美 人 螢 狩	松 野 親 信	あ け が ら す	歌 川 豊 国
立 美 人	西 川 祐 信	見 立 牡 丹 花 松 柏	月 岡 雪 鼎
縁 先 美 人 図	宮 川 長 春	三 保 松 原 図	十 返 舎 一
火 入 も つ 遊 女	宮 川 一 笑	巡 立 文 珠 菩 薩	葛 飾 北 斎
	無 款 ・ 石 川 派		葛 飾 北 斎



矢の根五郎の図 歌川国貞

講 演 会 9月20日「肉筆浮世絵の魅力」山口桂三郎氏
 美術を語る会 10月3日「肉筆浮世絵の見方」長野方治氏
 印刷物 図録 24.0cm×25.0cm 1,000部
 ポスター 72.8cm×51.5cm 1,500枚
 チラシ(兼・目録) B5 25,000枚

浅井忠と京都洋画壇の人々

会 期 昭和56年12月5日～昭和57年1月17日
 展示点数 246点
 入館者数 25,451人

本館では、開館以来本県ゆかりの洋画家浅井忠の調査研究を行い、昭和51年3月には特別展「浅井忠とその師弟展」を開催した。そこで今回は、浅井の京都時代に焦点をあてて回顧した。

浅井忠（1856～1907）は、明治35年（1902）パリ留学中に会った中沢岩太の勧めで、京都高等工芸学校の教授として京都に居住した。翌明治36年（1903）、伊藤快彦、鹿子木孟郎、牧野克次らと計り聖護院洋画研究所を開き、さらに明治38年（1905）には、関西美術院の設立に参画し、その院長として、梅原龍三郎、安井曾太郎、足立源一郎、斎藤与里、津田青楓、黒田重太郎、霜鳥之彦など多くの逸材を育て上げた。

浅井の京都での活躍は、わずか5年余ではあったがその果たした役割は大きく、後世の反官展アカデミズムの流れの礎をきずいたとも言われる如く、日本の近代洋画史の中に重要な位置を占めている。

本展覧会では、浅井の京都時代の作品を中心に、浅井と共に活躍した京都洋画の先覚者たち、さらに聖護院洋画研究所、関西美術院で学んだ人々の作品を展観し、浅井が京都洋画壇に与えた功績を再考した。



出 品 目 録

作家名	作品名	作家名	作品名
浅井 忠	中沢岩太の像	牧野克次	松厨鷹少の女
〃	聖護院の庭外	〃	〃
〃	奈良助八重成像	伊藤快彦	〃
〃	白川女	〃	〃
〃	弓を引く武士像	〃	〃
〃	老母の肖像	〃	〃
〃	大森の風景	都鳥英喜	真龍婦の早
〃	若王子川風景	〃	〃
〃	加茂川の風景	小笠原豊涯	洛中八重子
〃	象の図	〃	〃
〃	京都高等工芸学校の庭像	田村宗立	中官弁慶の雪景
〃	婦人風景	〃	〃
〃	欧州を背負う少女の像	桜井忠剛	落葉をかく人
〃	縫いもの柳	〃	〃
〃	グレイの風景	〃	〃
〃	ナポリの風景	〃	〃
〃	農婦の夕景	鹿子木孟郎	新某裸厨高
〃	フォンテンブローの夕陽	〃	〃
〃	洋上の夕陽	〃	〃
〃	落葉	〃	〃
牧野克次			

作家名	作品名
長谷川良雄	芋ボラの風景
ク	下鴨
ク	丹波口風景
ク	奈良公園にて
久保井翠桐	厨房
津田青楓	風景
ク	研究室に於ける河上壁像
ク	裸婦座像
小川千璽	木々
ク	林
ク	石塔
ク	港
田中志奈子	棒をもつ裸体
ク	裸体
ク	神官
ク	大原女
ク	符をもつ女
ク	裸婦
浅井忠	槐庭画帳
ク	絵手本
黒沼槐山忠	花鳥図
浅井忠	筑波日記
ク	鍛冶橋
ク	風景
ク	鎌倉建長寺(I)
ク	奈良
ク	従征画稿
ク	従征スチツチ
ク	金州城壁上
ク	魏子窩第二軍司令部
ク	天地人
ク	彩画初歩
ク	スケッチブック
ク	渡欧日記
ク	欧州日記
ク	欧州使用手帳
ク	絵はがき
ク	中学習画帖
ク	スケッチブック
ク	二十日会誌
ク	院内日誌
ク	月謝表
ク	明治41年度出席簿
ク	入学願書
ク	関西美術院歴史概要
霜鳥之彦	西洋図版模写
ク	人物写生(農婦)
ク	静物写生(馬印と兜)
ク	石膏デッサンの手本模写(脚)
ク	石膏デッサンの手本模写(背面)

作家名	作品名
霜鳥之彦	中等鉛筆画手本
浅井忠	図案画稿(バラの花)
ク	(溪流)
ク	(春日野花瓶)
ク	(鉢の図)
ク	(モロコシの図)
ク	(風俗図)
ク	(女神図)
ク	(煙草入れ)
ク	(ダチョウ図)
ク	(花木)
ク	(木かげの女)
ク	(魚図)
ク	(トンボ図)
ク	(ク)
ク	(戸棚図)
ク	(大津絵)
ク	杉林古香作品集
ク	虎信図
ク	韓と蘭の図
ク	蓮の図
ク	亀の図
ク	餓鬼の図
ク	ライオン
ク	お福
ク	羅漢
ク	墓仙人
ク	農婦
ク	スケットブック
ク	黙語会誌
ク	ク
ク	会計簿
ク	十六日会誌
ク	黙語会寄書
ク	宛新井謹也寄書
ク	宛書簡
ク	木魚遺響
ク	(原稿)
ク	吉野紀行・銀世界
ク	月瀬紀行・薫世界
ク	水彩スケッチ
ク	猿蟹合戦図茶器
ク	茶器
ク	農家風俗画手塩皿
ク	花瓶
ク	関西美術会第2回目録
ク	図案(木版)
ク	子規居士弄丹青図
ク	風俗五十番歌合

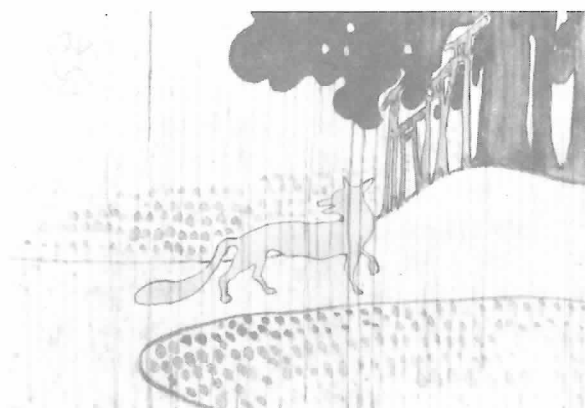
〈特別出品〉

梅原龍三郎
ク

北 京 秋 天
姑 娘



聖護院の庭 浅井 忠



雨中狐(印刷物図案) 浅井 忠

講演会 12月13日「京都時代の浅井 忠」 杉本秀太郎氏

美術を語る会 1月10日「浅井の遺業」 館長 高橋在久

印刷物 図録 25.8cm×18.3cm 1,000部

ポスター 72.8cm×51.5cm 1,000枚

チラシ(兼・目録) B 5 20,000枚

企 画 展

金工芸 信田洋回顧展

会 期 昭和56年 7 月 7 日～19日

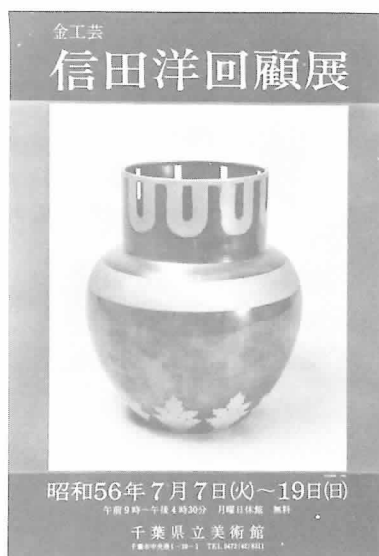
展示点数 57点

入館者数 3,542人

信田洋氏は、現在、日本彫金界の第一人者として活躍し、豊かな技術に裏づけられた格調高い作品を次々と生み出している。

昭和初期より千葉市稲毛に在住し、主に、帝展、文展、日展を舞台に力作を発表し続け、創造性に富む独自の美の世界を築いてきた。この間、日展審査員をはじめ、評議員、参与等を歴任し、また、その他の金工団体にも参加して、常に指導的な役割を果たしてきた。

本展は、氏の代表的な作品を展示して、その軌跡をたどるとともに、彫金の魅力を探り、その理解を深めるものとした。



出 品 目 録

作 品 名	制 作 年	作 品 名	制 作 年
銅 花 瓶 (馬)	大 正 14 年 頃	銅 瓶 (六 文 銭)	昭 和 45 年
蘭 鈕 香 炉	昭 和 8 年 頃	帶 装 瓶	昭 和 46 年
蒸 発 用 湯 沸 瓶	昭 和 9 年	立 姿 瓶	昭 和 47 年
白 銅 組 込 花 器	昭 和 10 年 頃	麦 秋 瓶	昭 和 47 年
彫 金 水 差 瓶	昭 和 11 年	布 目 象 嵌 銀 瓶	昭 和 47 年
小 紋 象 嵌 素 銅 花 瓶	昭 和 14 年 頃	銀 壺 (五 月 晴)	昭 和 47 年
黒 味 銅 切 嵌 の 鉢	昭 和 17 年	一 輪 生 (端 午)	昭 和 47 年
黄 銅 燭 台	昭 和 21 年	飛 鳥 瓶	昭 和 47 年 頃
鶉 文 銀 瓶	昭 和 22 年 頃	黄 銅 飾 皿 (駢 麟)	昭 和 47 年 頃
透 鉢 水 瓶	昭 和 24 年	飛 鳥 銀 壺	昭 和 47 年 頃
鳥 花 文 銀 酒 瓶	昭 和 24 年	銀 飾 皿 (花 菖 蒲)	昭 和 47 年 頃
(土筆文洋酒盃付)		幽 黒 瓶	昭 和 48 年
芙 蓉 置 物	昭 和 25 年	赤 銅 張 小 管	昭 和 48 年
象 嵌 鉄 角 盆 (鶉 鴒)	昭 和 25 年	赤 銅 壺 (作 品 73 番)	昭 和 50 年
象 嵌 小 紋 花 瓶	昭 和 28 年	赤 銅 香 炉	昭 和 50 年
押 出 壁 懸 (冠)	昭 和 31 年	赤 銅 香 炉	昭 和 50 年
銀 の 瓶	昭 和 35 年	銀 瓶 (ス ク ラ ム)	昭 和 51 年
黄 銅 花 い ら ず	昭 和 36 年	蘭 鈕 炉	昭 和 51 年
盤	昭 和 38 年	乳 装 銀 瓶	昭 和 52 年
花 器 (伸 び ゆ く 湾)	昭 和 39 年	鶴 首 銅 瓶	昭 和 52 年
装 瓶 (棲)	昭 和 41 年	銀 瓶 (マ ー キ ュ リ ー)	昭 和 53 年
黒 孔 雀 の 瓶	昭 和 42 年	銀 香 炉	昭 和 53 年
透 壺	昭 和 43 年	金 彩 壺	昭 和 54 年
装 瓶 (黒 艦)	昭 和 43 年	水 指 (蘭 鈕)	昭 和 54 年
銀 壺 (花 ひ ら く)	昭 和 44 年	銀 杓 立	昭 和 54 年
彫 金 額 (き つ ね)	昭 和 44 年	銀 蓋 置	昭 和 54 年
ひ さ 古 瓶	昭 和 44 年	ひ さ 古 瓶	昭 和 55 年
額	昭 和 44 年	名 刺 盆	昭 和 55 年
九 曜 盤	昭 和 45 年	金 冠 銅 瓶	昭 和 55 年



美術を語る会 7月11日「彫金工芸の魅力」鈴木治平氏

印刷物	図録	20.0cm×21.0cm	1,000部
	ポスター	59.3cm×42.0cm	1,000枚
	チラシ (兼目録)	B 5	5,000枚

浅井真展

会 期 昭和56年 7月23日～8月20日

展示点数 124点

入館者数 9,330人

本館では、開館以来、本県ゆかりの美術家を調査研究し、その紹介と顕彰を行なっている。

本年度は、「房総の美術家シリーズ」として、洋画にすぐれた技量を示した浅井真に焦点をあてた。彼は、浅井忠の甥にあたり、明治32年千葉市に生まれ、千葉中（現千葉高）を卒業後、太平洋画会研究所に入所して本格的に洋画を学んだ。太平洋画会会員となり、また、帝展、文展、日展を舞台に活躍したが、戦後まもなく画壇と交渉を断ち、独り描き続けた。

本展覧会では、彼の残した作品を一堂に展観し、その軌跡を広く県民に紹介した。



出品目録

作 品 名	制作年	作 品 名	制作年	作 品 名	制作年
習 作 A	昭和34～35	牡 丹	昭 和 47	夏 木 立	昭和36～37
裸 婦 B	昭和34～35	シ ク ラ メ ン	昭和37～38	晩 秋	昭 和 46
裸 婦 D	昭和34～35	花 菖 蒲	昭 和 37	秋 の 白 樺 林	昭 和 38
習 作 B	昭和34～35	シンビジュウム	昭 和 43	林	昭 和 31
習 作 1	昭和27～28	ば ら	昭 和 47	沼	昭和35～37
習 作 2	昭和34～35	ネ ギ 坊 主	昭和37～38	池 畔	昭和35～37
習 作 3	昭和34～35	ベ ゴ ニ ア	昭 和 47	林	昭和17～18
習 作 4	昭和27～28	秋	昭 和 40	伊 那 の 唐 松	昭和38～40
習 作 5	昭和34～35	洋 梨	昭和42～43	日 光 街 道	昭 和 36
習 作 6	昭和34～35	椿	昭 和 48	五 月 の 海	昭 和 38
習 作 C	昭和34～35	あ ざ み	昭和37～38	雪 の 溪 流	昭 和 39
裸 婦 A	昭和34～35	ざ く ろ	昭和42～43	雪 と 石	昭 和 39
裸 婦 C	昭和34～35	シンビジュウム	昭 和 48	太 海 海 岸	昭 和 35
梅 林	昭 和 23	き く	昭 和 48	佐 渡 の 海	昭 和 36
梅	昭和29～30	山 百 合	昭和35～36	宮 城 相 川	昭 和 38
梅 林	昭和35～36	け し	昭和35～36	西 丹 沢 帚 沢	昭和43～44
雑 木 山 と 梅	昭和37～38	椿	昭 和 42	津 軽 岩 崎 海 岸	昭 和 47
伊 那 の 梅	昭和27～28	唐 松 林	昭 和 38	五 月 の 海	昭 和 35
赤 軸 の 梅	昭 和 50	秋 色	昭和43～44	石	昭和43～44
A 嬢 像	昭 和 6	林	昭和36～37	石	昭 和 37
自 画 像	昭和22～23	深 山 榛 の 木 林	昭 和 38	佐 渡 の 岩	昭 和 37
ど く だ み	昭 和 40	水 辺 の ポ プ ラ	昭和43～44	岩 A	昭 和 37
ポ ピ ー	昭 和 48	新 緑 の 雑 木 林	昭 和 38	岩 B	昭 和 37
タ ン ポ ポ	昭 和 40	雑 木 林	昭 和 45	興 津 海 岸	昭 和 34
白 花 ベ ゴ ニ ア	昭 和 47	銀 杏 の 道	昭 和 36	岩 C	昭 和 35

作 品 名	制作年	作 品 名	制作年	作 品 名
岩 D	昭和 47	裏 磐 梯	昭和 35	紅 梅
秋 の 山	昭和 44	秋	昭和 22	カタクリの花
雪 の 丘	昭和 22	裏 磐 梯	昭和30～31	ネ コ
井之頭公園	昭和 42	伊 那	昭和 45	赤 い 花
錦 繡 の 山	昭和 20	雪 山 遠 望	昭和27～28	カ エ ル
藤 花	昭和 40	雪 景	昭和18～19	ザ ク ロ
雪 後	昭和 38	棒 の 丘	昭和 38	ビ ワ
興 津 海 岸	昭和 34	戸 隠 秋 色	昭和 46	入 道 雲
見 晴 砦 泉	昭和 42	房 州 波 太	昭和 15	サ ザ エ
桐 花	昭和 38	木曾開田村の五月	昭和 19	黒 花 瓶 に 花
春	昭和26～27	デ ッ サ ン 1	昭和32～33	トウモロコシ
秋 霧	昭和 47	デ ッ サ ン 2	昭和32～33	つ る
春 雪	昭和 39	デ ッ サ ン 3	昭和32～33	ハ タ ハ タ
四 月 の 海	昭和 34	デ ッ サ ン 4	昭和32～33	古 杭
早 春	昭和 35	デ ッ サ ン 5	昭和32～33	せ せ ら ぎ
伊 那 谷 の 秋	昭和 22			福 寿 草
夏 雲	昭和 42			ク ワ イ



美術を語る会 昭和56年 8 月 8 日「浅井真の芸術」兼巻通高・洋子御夫妻，中村陽三氏

印刷物 ポスター 72.8cm×51.5cm 1,000枚
チラシ（兼・目録）B5 5,000枚

第5回 千葉県移動美術館

流山市郷土資料館
会 期 昭和56年10月7日～20日
八日市場市立公民館
会 期 昭和56年10月24日～11月1日
展示点数 53点
入館者数 流山市郷土資料館 1,306人
八日市場市立公民館 2,386人



千葉県立美術館収蔵作品による

千葉県移動美術館

56.10.7 20 56.10.24 11.1
流山市郷土資料館 八日市場市立公民館
千葉県立美術館収蔵作品による

千葉県立美術館は、昭和49年10月に開館して以来、郷土にかかわりの深い作品を中心に徐々に収集の輪を広げている。これらの作品は、県立美術館の常設展において、特別展等の期間を除いて順次公開されているが、更に、より広範な地域の皆様に美術作品鑑賞の機会を提供するため、企画されたのが千葉県移動美術館である。この機会に、千葉県立美術館の活動の一端を理解いただくとともに、美術をより良近かなものとしてとらえ、心ゆくまで、十分に御鑑賞いただくため企画した。

出品目録

〈日本画〉		作家名		作品名	
作家名	作品名	作家名	作品名	作家名	作品名
富取風堂	群魚	瑛九	林の月	林の月	月
渡辺学	川口	〃	よこび	よこび	B
松尾敏男	原野	星裏一	王の樹	王の樹	樹
後藤純男	山門雨後	〃	陽(林)	陽(林)	
〈洋画〉		深沢幸雄	古い楽譜	古い楽譜	譜
都鳥英喜	婦人像	〃	虚空の影	虚空の影	影
石井柏亭	信州風景	池田満寿夫	遙かなる通り	遙かなる通り	り
霜鳥之彦	緑のスウエーター	〃	夜の旅	夜の旅	旅
黒田重太郎	女と小犬	池田良二	Together again	Together again	
原勝郎	モンマルトル	〃	Nobody knows my mind	Nobody knows my mind	
鶴田吾郎	お山の鈴音	〈彫刻〉		聖観音	音
石橋武治	白鷺のいる風景	大川逞一	倚る使	倚る使	使
椿貞雄	横堀角次郎兄像	大須賀力	天	天	
中西利雄	外房風景	郡司和男	〈工芸〉		
板倉鼎	金魚と雲	香取秀真	鳳凰文様花瓶	鳳凰文様花瓶	瓶
小堀進	花と海	〃	菊文獅子香炉	菊文獅子香炉	炉
無縁寺心澄	医大尖煙突	〃	笑獅香炉	笑獅香炉	炉
笹岡了一	秋麗芦の湖	〃	鳩香炉	鳩香炉	炉
桜田精一	冬の並木道	津田信夫	一點玲瓏	一點玲瓏	瓏
篠崎輝夫	絵馬による	〃	鴨	鴨	
鬚嘔	INSECTS	〃	鳳翔薫炉	鳳翔薫炉	炉
原三郎	廃船	〃	北辺夜描子	北辺夜描子	子
時田幸彦	ピサの斜塔	信田洋	黒孔雀の瓶	黒孔雀の瓶	瓶
〈版画〉		〃	銀壺(花ひらく)	銀壺(花ひらく)	
浜口陽三	テーブル掛けとサクランボ	〃	乳装銀瓶	乳装銀瓶	瓶
〃	二匹の蝶	〃	金冠銅瓶	金冠銅瓶	瓶

作家名		作品名	
《書》			
大石隆子	待天	思	君 颯 昌 明
小暮青風	万視		
鈴木方鶴	松		
金子聰			



八日市場市立公民館



印刷物 ポスター 59.3cm×42.0cm 1,000枚
目録(兼・チラシ) B5 2折 10,000枚

各美術団体の受賞作品を展観 現代美術の動向を紹介

第15回現代美術選抜展

会 期 昭和57年 1月29日～2月11日

展示点数 77点

入館者数 6,076人

文化庁では、各美術団体が中央において実施している美術展覧会の受賞作品を一堂に集め、現代美術の動向をひろく一般に紹介することによって美術の振興に寄与する目的で毎年その巡回展を行なっている。幸いにも本館において、これら現代美術秀作を展観し、県民の皆様に鑑賞していただく機会を得た。

第15回展を迎えた現代美術選抜展は、昭和55年後半から56年前半に開催された美術公募団体展のうち15団体から推薦された受賞作品を中心に、その他招待作品としてそれらの団体展での総理大臣賞・文部大臣賞受賞作品を、また別に特別出品として昭和55年度文化庁買上げ優秀美術作品をあわせ、77点の絵画と彫刻を集めている。

ここに選ばれた作品を通して、多様化する現代美術の動向を理解していただく一助となれば幸いである。

なお、本県関係の出品作家は、高畑郁子(日本画)・渡辺学(日本画)・鵜田喜美(洋画)・細川尚(洋画)・石井武夫(洋画)・伊東繁特(版画)の6氏である。

第15回 現代美術選抜展



会期 1月29日金～2月11日*

千葉県立美術館

出 品 目 録

日 本 画				作 家 名				作 品 名								
作 家 名				作 品 名				渡 辺 学				白 い 海 (屏 風 ヶ 浦)				
上	村	淳	之	雁	(雪	中)	洋	画				陽	だ	ま	り	
川	端	健	生	神	樹	Ⅱ	鵜	田	喜	美		陽				
高	畑	郁	子	慈		界	細	川		尚		私	を	み	つ	
堀	越	保	二	行	く	秋	川	口	清	和		Q		夫	め	
市	原	義	之	水		辺	堀		研			風	の	中	ゆ	
上	田	勝	也	今	日	そ	鷹	啄	栄	峰		変		動	Ⅱ	
宇	佐	美	江	浄		て	吉	井	章			リ	フ	レ	イ	
岡	村	倫	中	行	く	人	井	上	俊	郎		ア	ス	タ	ー	
川	崎	鈴	彦	翳		り	吉	江	新	二		青	い	風	景	
岸	野	圭	作	し	じ	ま	大	島	由	美	子	Composition C				
小	松	正	二		陽		藤	沼	多	門		ガ	ラ	ス	の	
辰	巳		寛	ふ	た	り	平	井	美	佐	子	小	前			を
野	々	内	良	牛	と	人	安	田		巖		山	と	石	仏	
山	崎	啓	次		雍		佐	々	木	美	枝	山	と	石	仏	
渡	辺	武	蔵	愁		音	玉	井	敏	子		作	品			A
菊	川	三	織	望		郷	相	田	幸	男		寡				占
北	沢	映	月	朱	と	黒	石	井	武	夫		イン・ドア…アフタヌーン				
高	橋	常	雄	聖	地	追	伊	藤	高	義		D U M M Y (A)				
月	岡	榮	貴	愛	鳥	図	黒	川	彰	夫		大地の女たち(聖なる流れ)				
松	本	哲	夫	天		壇	中	村	直	人		室 内 想 影 (I)				
真	野		満	後	白	河	三	輪	な	つ	子	会				合
小	栗		潮	麦	院	と	山	崎		進		イ リ ユ ー ジ ョ ン				
					遊	女						風	を	集	め	て

作家名	作品名
吉田 富士夫	催眠術
江藤 哲	静物
佐藤 進	館
島田 利一	薬師如來
太幡 九百三	羽子板市間
寺井 重三	レッスンの合い
藤森 兼明	画室にて
三原 捷宏	夏の終り
小野寺 博	Night Screen A
佐藤 素康	わ・く
島田 章三	課題制作
脇田 和	かくれんぼ
版画	
青木 鐵夫	ON THE GROUND - 20
伊藤 繁特	哥 - 16
樋口 裕子	居 - 守 C
三塩 英春	睡眠実験 1 (浮游)
吉田 亜世美	線による作品 L 5 - C P K

作家名	作品名
土田 雅昭	WORK - '79 - VI
彫刻	
大和田 正人	4つの部分
小井戸 満	指標...その波紋
西野 慎二	ヤマカラ女
久保 制一	み世からの追伸
中江 紀洋	宿鉄婦人
安部 千隆	魅惑の果て
乗松 巖	難民キャンプの子供
板橋 一歩	ファントジー
恩田 静子	夏
江里 敏明	腰かけた婦
小森 邦夫	未ひたむき
野島 耕之介	蠕動 R
山本 真菟	
山中 本村	



印刷物	図録	24.1cm×18.2cm	800部
	ポスター	72.8cm×51.5cm	1,000枚
	目録 (兼・チラシ)	B 5 2折	8,000枚

千葉県芸術祭

第33回 千葉県美術展覧会

会 期 昭和56年10月24日～11月15日

展示点数 1,682点

主 催 千葉県美術会・千葉県教育委員会・千葉県

本県の美術家の作品を広く紹介するとともに、県民の美意識を高め、郷土美術文化の振興と情操の純化に資するために開催するもので、日本画・洋画・彫塑・工芸・書道の各分野を展示した。



出品点数

	会 員 点 数	公 募 点 数	入 選 点 数	展 示 点 数	新 入 選
日 本 画	79 (81)	209 (184)	154 (184)	233 (265)	47
洋 画	182 (184)	658 (601)	347 (334)	529 (518)	90
彫 塑	56 (49)	32 (32)	31 (30)	87 (79)	13
工 芸	45 (44)	141 (136)	117 (100)	162 (144)	3
書 道	168 (160)	810 (740)	504 (511)	672 (671)	95
計	530 (518)	1850 (1693)	1153 (1159)	1682 (1677)	248

()内は32回県展

解説会 10月31日 工 芸 猪俣伊治郎氏
 11月 1日 書 千代倉桜舟氏
 11月 7日 日本画 五十嵐 幹氏
 11月 8日 洋 画 積田 鑑士氏
 11月14日 彫 塑 長谷川 昂氏

印刷物 目録 25.8cm×18.4cm 3,000部 ポスター 36.4cm×51.8cm 1,000枚

第13回千葉県高等学校芸術祭

美術・工芸・書道展

会 期 昭和56年11月19日～11月29日
主 催 千葉県高等学校芸術祭実行委員会
千葉県教育委員会

高等学校美術科、工芸科、書道科の一年間の平常授業での成果と、課外活動での成果及び教員の研究作品を展示し合うことにより、生徒は創作活動を刺激され、他校の状況を知り、教員は他校との比較で教育効果、方法について研究することを直接に目指し、間接には千葉県の芸術活動を昂揚することを目的とした。

参加状況

部 門	書 道	美術・工芸	計
生 徒	85校	72校	157校
教 員	74校	24校	98校
計	159校	96校	255校

印刷物 ポスター 73.0cm×51.5cm 500枚 目 録 B5 1,000枚

'81 千葉県高等学校総合芸術祭



昭和56年度千葉県芸術祭

第4回千葉県写真展

会 期 昭和56年11月19日～11月29日
展示点数 129点
主 催 千葉県写真家協会・千葉県教育委員会

首都に隣接する本県は、開発の一途を歩み目まぐるしい変貌をとげつつある。失われつつある風土を、一般公募の作品を中心にプロ写真家の秀れた作品を含み、広く県民に紹介した。

応募者数	応募点数	入選者数	入選点数	展示点数	会 員 数
149	402	84	98	129	14

昭和56年度千葉県芸術祭

第31回千葉デザイン展

会 期 昭和56年9月29日～10月4日
展示点数 166点
主 催 千葉商業美術協会
千葉市教育委員会
千葉県教育委員会

商業デザイン作品を公募、展示することにより、県内デザインの質的レベルアップをはかるとともにデザイン志向者の育成に努めた。

応募者数	応募点数	入選者数	入選点数	展示点数	会 員 数
113	113	14	14	166	21



団 体 展

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
第 7 回 弥 生 展	書星会の師教・師範による作品発表をおこなった。	56. 3. 31 ～4. 5	102
第 4 回 千 葉 新 芸 術 展	新芸術至上主義による造形美術の探究・研賛をもって真の芸術を開拓樹立し、画壇における最もオリジナルなギルトとして名誉ある足跡を記録することを目的とした。	56. 4. 7 ～4.12	45
第 18 回 全 日 本 総 合 書 道 大 展 覧 会	郷土の書道文化の向上をめざすため、一般・学生より公募し、応募者各位の作品の力量を競い合うことを目的とした。また全国各地からの参加もあった。	56. 4. 13 ～4.19	1, 370
第 4 回 等 迦 千 葉 支 部 展	会員相互の自由な芸術的立場を尊重し、助け合いながら共通の発表の場を維持し、各自の作家的完成を目標とした。	56. 4. 21 ～4.26	81
第 8 回 千 葉 新 協 展	県内に在住する会員の研究発表を目的とするものであり、油彩・水彩・写真の作品を展覧した。	56. 4. 28 ～5. 5	80
第 1 回 千 葉 美 術 工 芸 展	現代生活にフィットする新しい造形を求めた工芸作品（陶芸・金工・染色・木工・硝子等）を展覧した。	56. 4. 28 ～5.10	100
第 7 回 歩 会 彫 刻 展	県内の彫刻家が集まり、所属団体や流派にとらわれない自由な勉強と県下に作品を発表することを目的とした。	56. 4. 28 ～5 10	56
第 8 回 千 虹 会 日 本 画 展	千葉市を中心に在住の日本画家で各公募展において受賞した作家たちの作品を展覧した。	56. 5. 7 ～5.17	27
千 葉 市 ア マ チ ュ ア 美 術 ク ラ ブ 展	千葉市民又は千葉市内勤務者のアマチュア美術家及び美術愛好者の親睦を深め会員相互の技術の向上を目的とした。	56. 5. 12 ～5.17	181
二 科 千 葉 支 部 展	広く県下の一般・ジュニアより作品を公募し県美術文化の振興発展を願い、二科会の趣旨にそって開催した。	56. 5. 19 ～5.24	1, 271

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
二 紀 会 千 葉 県 支 部 展	「美術の価値を流派の新旧に置かず、皮相の類型を排する」という二紀会の趣旨のもとに支部展を開催した。	56.5.19 ～5.24	58
日本教育大学協会第2部会 書 道 部 門 教 官 作 品 展	全国教員養成大学書道教官の研究成果を展示し、書道及び書写書道教育の振興と地域の学校教育及び地域文化の進展に寄与することを目的とした。	56.5.26 ～5.31	230
第 4 回 千 葉 一 陽 会 展	千葉県内在住美術家の絵画研修と美術普及のための展覧会。	56.6.2 ～6.7	59
第 12 回 表 美 展	県内の表具・経師・内装の技術の向上を図り、地域文化産業の発展に期することを目的に作品を公開し、日本古来の伝統技術の向上及び普及につとめた。	56.6.2 ～6.7	120
千 葉 県 書 道 協 会 展	書道文化の振興と会員相互の研修・親睦をはかることを目的とした。	56.6.6 ～6.14	290
新 槐 樹 社 千 葉 支 部 展	千葉県内在住会員の作品を広く公開するとともに、郷土の美術文化発展向上のために展覧した。	56.6.9 ～6.14	110
第 2 回 千 葉 全 展	地方会員の斯道奨励と地方美術文化の向上・発展をめざして開催した地域公募展である。	56.6.16 ～6.21	147
第 5 回 墨 の 県 展	東京の隣接都市としての千葉の文化発展に力をつくし、併せて県民に伝統文化の啓蒙を促した。	56.6.23 ～6.28	212
第 4 回 精 鋭 展	女流作家を主体とする絵画展であり、既成のアカデミックな美学にあきたりない新進気鋭の作品発表を主とした。	56.6.23 ～7.5	41
現 代 書 道 50 人 展 現 代 書 壇 代 表 名 作 展 千 葉 書 壇 秀 抜 展 千 葉 書 壇 新 進 展	現代書道界における佳作と千葉県内から秀抜された作品を一堂に展示し、書道のより一層の興隆と普及をはかった。	56.6.30 ～7.5	320

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
第 5 回 千葉美術シンポジウム展 & 青 枢 展	混迷する現代社会にあって常に新しい世紀の幕開けを目指し、生命の尊厳に根ざした新たな芸術の探究・創造に努めた。	56.7.7 ～7.19	138
第 11 回 千葉市水墨画 同好会連合会展	会員の作品を広く一般に紹介するとともに水墨画の普及・啓蒙につとめた。	56.7.21 ～7.26	629
第1回日本国際美術家協会展	国際的芸術交流と作品発表を通じ、芸術家の地位向上を計るとともに、世界の恒久平和に貢献することを主眼とした。	56.7.28 ～ 8.2	465
龍峽書道会千葉県入展	書道の普及推進をはかり、併せて健全なる精神の涵養に努め、ひいては人間形成の稊成に努めることを目的とした。	56.8.4 ～ 8.9	1,000
千葉県写真家協会展	「貴方の選んだ県会議員の家庭に於ける素顔」というテーマで県民により一層親しまれる県会議員の方々を紹介した。	56.8.4 ～ 8.9	48
第 1 回 千葉サンケイ現代洋画展	千葉県の美術文化の振興と発展に寄与し、郷土の新人の発掘を目的とした公募展。	56.8.11 ～8.16	193
千葉市教職員美術展	千葉市在住・在勤の教職員の創作意欲を活発にし、図工・美術教育の指導力の向上をはかった。	56.8.18 ～8.30	148
第11回いてふ会彫刻展	図工・美術科教師としての資質を高める為の研究の一端を作品発表を通して、会員の研修と同時に県下の数多くの保護者・児童・生徒をして美術に親しませる機会とした。	56.8.18 ～8.30	44
第6回子供と教師の作品展	児童作品を発表し、造形美術教育の振興をはかるとともに、教師の造形作品についての研修・研究の場とした。	56.8.25 ～8.30	695
第10回写真千葉県展	県内全写真人を対象に写真文化の推進を目的に一般公募し、その作品を通してゆたかな心とゆとりある社会を築く一助とした。	56.8.25 ～ 9.6	214

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
静 雅 書 道 会 千 葉 地 区 小 中 学 部 展	就学前児童より中学生までの生徒による一年一度の日頃の成果を発表し、父兄及び一般からの声を聞き、今後の糧とした。	56.9.1 ～ 9.6	226
第 8 回 文化書道千葉県連合会展覧会	文化書道会の教育書道の本義に則り、県下の会員及び傘下の学童作品を展示して、その成果を問うた。	56.9.1 ～ 9.6	1,056
中 国 現 代 画 家 展	長い伝統をもつ中国画を老大家及び新進画家の作品並びに書を紹介し、日中両国の文化交流の発展に寄与することを目的とした。	56.9.1 ～ 9.6	155
二 科 写 真 部 千 葉 支 部 展	県内の写真作家の作品を展示し、会員相互の技術向上を図るとともに後進の育成に努めた。	56.9.8 ～9.13	65
第 21 回 白 扇 書 道 会 展	会員や公募作品の発表とともに、中国の原拓を展示し、県民の鑑賞力を高め、また、会員の研究心を高めることを目的とした。	56.9.8 ～9.13	2,800
第 7 回 千 葉 県 児 童 美 術 展	児童の絵画作品を通して相互交流を図り、児童の情操と美的感性の向上に資した。	56.9.15 ～9.20	800
新 構 造 県 支 部 美 術 展	絵画・工芸・写真部門からなり、これらの展示を通し地方作家の発掘を願い、かつ県民の教養向上に努めた。	56.9.15 ～9.20	93
千 葉 81 展	実験的な制作活動を行う美術家の交流をはかり、相互啓発をするとともに、各作家の研究内容を十分に紹介できる十分なスペースを確保し、新しい美術についての理解を深めるため開催した。	56.9.22 ～9.27	151
塑 の 会 展	県内在住の主婦によるグループで、会員相互の研修・親睦をはかることを目的とした。	56.9.29 ～10.4	49
第28回千葉県勤労者美術展	県内勤労者が余暇を利用して創作した美術品の発表の場を提供することによって、文化的教養の向上をはかった。	56.9.29 ～10.4	312

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
フ ァ ン シ ー 洋 画 展	会員の技術を深め、多くの人々に作品を鑑賞してもらい、批評を受け、今後の制作活動の糧とした。	56.9.29 ～10.4	85
第 24 回 千 葉 市 小 ・ 中 ・ 養 護 学 校 児 童 ・ 生 徒 作 品 総 合 展	書写・理科・図工美術・技術家庭・特殊教育・学校園4部門にわたり、市内児童・生徒の作品を公開し、一年間の作品評価を行うとともに、教師、児童・父母の啓蒙に資した。	56.10.6 ～10.14	7,600
屈 折 の 養 分	本県在住の若手作家を中心に、平面・立体のジャンルを超えた現代美術の状況を提示することにより、今日の美術のあり方を理解・認識してもらうことを目的とした。	56.12.1 ～12.6	10
第 1 回 日 本 春 秋 書 院 千 葉 県 書 道 連 盟 展	会員の作品を広く公開し、書を通じての相互親睦と書の美術・技能の向上をはかった。	56.12.1 ～12.6	155
第 26 回 こ ど も 県 展	次代を担うこども達の美的情操を豊かにし、創造性を高めることを目的に、県内児童・生徒の絵画作品を一堂に展示した。	56.12.8 ～12.20	5,934
第17回登龍社・宮坂会書初展	書の古典に立脚し現代に創作して、伝統ある書初として展示し、書道の向上発展をはかった。	57.1.5 ～1.10	400
千 葉 県 大 学 美 術 連 盟 展	美術を媒体とし、各加盟サークル間の親睦をはかり、研究活動の集大成を多くの美術愛好家に批評してもらい、今後の糧とするとともに芸術文化の振興をはかった。	57.1.5 ～1.10	143
第 4 回 千 葉 展	新象作家協会・独立美術協会・モダンアート協会・行動美術協会・創画会・新制作協会に所属する県内在住の作家による中央画壇の活気ある現代美術を広く県民に紹介した。	57.1.12 ～1.24	111
親 子 絵 画 展	親と子表現こそ異なる絵画に託した夢を作品として発表し、多くの方々に批評してもらい、かつコミュニケーションの輪を広げようと開催した。	57.1.26 ～1.31	237
葉 美 会 展	本館友の会員が創作の楽しみを分かち合いかつ実技講座や写生会等の成果を発表し、今後の糧とした。	57.1.26 ～2.7	97

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
第 34 回 千 葉 県 小 ・ 中 ・ 高 校 書 初 展	課題を統一募集し、地方で審査するとともに中央で席書を行い、習字・書道教育の向上と振興をはかった。	57.2.2 ～ 2.7	838
千 葉 大 学 教 育 学 部 美 術 科 卒 業 制 作 展	卒業を目前にして4年間の美術科教育研究の成果の一部を作品を通して発表した。	57.2.16 ～2.21	120
千 葉 大 学 学 生 書 道 展	卒業生を中心とした学生の一年間の学習の成果を発表した。	57.2.16 ～2.21	202
第 7 回 千 葉 県 民 写 真 展	アマチュアカメラマンが、その力量を競い合い、写真文化の発展と写真を通じて地域社会に貢献する精神の涵養を目的とした。	57.2.16 ～2.28	350
第 7 回 こ ども 造 形 展	幼児・児童の立体・平面の作品を発表し、彼らの意欲の増進と美術教育の研究を目的とした。	57.2.23 ～2.28	360
第 8 回 雁 鴻 会 展	和洋女子大学の書道選択者の卒業にあたり、4年間の研修成果を発表した。	57.2.23 ～2.28	65
第13回千葉市民美術展覧会	千葉市民よりの公募展であり、市民の芸術文化の振興と向上をはかった。	57.3.2 ～3.22	1,190
第 29 回 書 星 教 育 部 展	小・中・高校生の習字・書道の振興と技能向上のため半切による大作を指導し、併せて創作活動と作品鑑賞の両面の向上をはかった。	57.3.24 ～3.28	2,256

講演会

(1) 肉筆浮世絵の魅力

講師 立正大学教授 山口桂三郎氏

期 日 昭和56年9月20日

浮世絵は庶民の町絵師が庶民のために庶民の生活を描いたものであり、現在、浮世絵といえば版画の方が一般的であるが、本流は肉筆画である。そして、版画を創作した人々は肉筆画にも筆をとり優れた作品を残している。

版画が肉筆より優れたもののように考えられがちなのは、版画が多く海外に流出し、海外の評価が高まったことによるものである。

版画が同じ作品が多いのに比べ、肉筆の作品が極めて少ないということにおいても肉筆画が貴重なものといえる。このような意味から、この展覧会における肉筆浮世絵の優れた芸術性を見ていただきたいと話された。そして、本展に出品されている中から代表的な作品について解説されたが、特に日本で初めて公開された作品や外国から里帰りした作品などについてその貴重さと内容の豊かさにふれられた。

また、千葉県と浮世絵師との関係は大で、浮世絵師の筆頭に立つ師宣の出身地で、英泉も木更津の近くの出身、北斎は下総葛飾郡の出身、広重もしばしば訪れているというように深いかかわりをもっている。みなさんは、浮世絵に深く関心を持たれ、その真価を広く理解していただきたいと結ばれた。

(2) 京都時代の浅井忠

講師 京都女子大学教授 杉本秀太郎氏

期 日 昭和56年12月13日

氏は三冊の著書に浅井忠の図案を使っているが、それはとりもなおさず浅井忠が好きであるからだと前置きされて、京都時代の浅井忠について語られた。そして、まず黒田重太郎の著書「京都洋画の黎明期」から、浅井忠と正岡子規との親しい交流にふれられ、子規にあてた手紙等から当時の浅井の活躍ぶりを話され、特に、浅井がヨーロッパで見た「万国博」での日本からの絵を痛烈に批判して、日本人の洋画がヨーロッパのそれに匹敵するぐらいになるには100年以上かかると書いているという。そして、それほど浅井はヨーロッパでの洋画と当時の日本における洋画を比べて衝撃を受けたのであろうという。

次に氏は、弟子たちのことにふれられ、伊藤快彦、加藤源之助、安井曾太郎、梅原龍三郎らといった当時の若い人たちが、浅井という指導者を得て絵を描くことを志していった様子を話された。また、浅井の水彩画に対する考え方も話され、特に、「書」と水彩画との関連について「筆さばき」の巧みさから、日本では水彩画はもっと盛んにならなければならないと考えていたという。

最後に氏は、浅井が裸体とバラを描かなかったが、そういう浅井が好きで、好きであるからこそ浅井についていろいろ考えるわけであると結ばれた。



「肉筆浮世絵の魅力」



「京都時代の浅井忠」

実 技 講 座

「みる・かたる・つくる」という本館の事業の一環として実技講座を実施しているが、本年度は次の講座を行った。

(1) 日本画入門講座

期 日 昭和56年10月10日・11日・13日・14日・15日・16日

講 師 県美術会常任理事 渡辺 学氏

参加者数 25名

内 容 日本画の材料や技法などの講義のあと実習にはいり、花、くだもの、野菜などを題材にして色紙に描き、物の見方、色のぬり方など日本画の基礎的な技法について学習した。



(2) デッサン入門講座

期 日 第1期 昭和56年5月15日・16日

第2期 昭和56年8月25日・26日

第3期 昭和56年10月13日・14日

講 師 第1期 千葉大学助教授 戸田健夫氏

第2期 県美術会理事 羽生智樹氏

第3期 県美術会常任理事 積田鏗士氏

参加者数 各期30名

内 容 人物や石膏のデッサンを行い、形のとり方、明暗・立体感・動き・質感・空間感などデッサンの基礎的な技法について学習した。



(3) 洋画入門講座

期 日 第1期 昭和56年5月9日・10日

昭和56年6月13日・14日

昭和56年7月11日・12日

第2期 昭和56年12月5日・6日

昭和57年1月16日・17日

昭和57年2月13日・14日

講 師 第1期 千葉大学教授 太田洋三氏

第2期 県美術会会員 根岸茂行氏

参加者数 各期30名

内 容 人物・静物・風景などを題材にして、デッサンから油彩による制作を通して、洋画の基礎的な技法について学習した。



(4) 洋画研修講座

期 日 第1期 昭和56年5月30日・31日

昭和56年7月4日・5日

昭和56年9月5日・6日

第2期 昭和56年10月24日・25日

昭和56年11月21日・22日

昭和56年12月19日・20日

講 師 第1期 千葉大学教授 武内和夫氏

第2期 県美術会理事 高橋規矩治郎氏

参加者数 各期30名

内 容 洋画入門講座を修了したもの、または、同程度の者を対象にし、油彩による裸婦の制作を中心に入門講座より技術的にやや高い内容を学習した。



(5) 版画入門講座

期 日 昭和57年 1月24日・31日

昭和57年 2月7日・14日

昭和57年 2月21日・28日

講 師 日本版画協会会員 深沢幸雄氏

参加者数 25名

内 容 エッチング、アクワチントなどの制作を通して、材料、
用具、技法等、銅版画的な基礎的な内容について学習した。



(6) 彫塑入門講座

期 日 第1期 昭和56年 5月12日・13日・19日

20日・26日・27日

第2期 昭和56年10月27日・28日

11月3日・4日・10日・11日

講 師 第1期・第2期とも

新制作協会会員 青木三四郎氏

参加者数 各期 20名

内 容 首像の制作を行い、心棒づくりから粘土による肉付け、
石膏取りまでの学習をし、彫塑の基礎的な技法について
学んだ。



(7) 陶芸入門講座

期 日 第1期 昭和56年 6月4日・5日・6日・7日

7月7日・14日

第2期 昭和56年11月17日・18日・19日・20日

12月17日・22日

講 師 第1期 県美術会理事 横山光ノ介氏

第2期 県美術会常任理事 三橋英作氏

参加者数 各期30名

内 容 カップ、まっ茶わん、花びん等の制作を通して、粘土、
釉薬などの材料についてやひもづくり、板づくりなど陶
芸の基礎的な技法について学習した。



(8) 七宝焼入門講座

期 日 第1期 昭和56年 9月12日・13日

第2期 昭和56年11月14日・15日

第3期 昭和57年 2月27日・28日

講 師 第1期・第2期・第3期とも

千葉大学教授 長南光男氏

参加者数 各期30名

内 容 ブローチ、ペンダントなど身のまわりの装飾品の制作を
通して、七宝焼の材料や基礎的な技法について学習した。



(9) 書芸入門講座

期 日 第1期 昭和56年7月22日・23日・24日

第2期 昭和57年1月20日・21日

講 師 第1期・第2期とも

県美術会常任理事 浅見錦龍氏

参加者数 各期30名

内 容 第1期は漢字，第2期はかなを中心に学習し，筆や硯などの用具についてのことや，楷書，行書，草書と実際の練習を通して，書道の基礎的な学習をした。



(10) 書芸研修講座

期 日 昭和57年3月6日・7日

講 師 県美術会会長 浅見喜舟氏

参加者数 30名

内 容 書芸入門講座を修了したもの，または，同程度の者を対象にし，楷書，行書，草書のほか，隷書や条幅の書き方など入門講座よりやや高い内容を学習した。



(11) てん刻入門講座

期 日 第1期 昭和56年7月29日・30日

第2期 昭和56年8月29日・30日

第3期 昭和56年11月28日・29日

講 師 第1期・第2期・第3期とも

県美術会会員 霊園鴻甫氏

参加者数 各期30名

内 容 てん刻の歴史や用具，材料についての学習や自分の名前を印材に刻する制作を通して，てん刻の基礎的な技法を学習した。



美術を語る会

美術普及事業の一環として、美術一般に関する問題をテーマに「美術を語る会」を定期的に行き、作家や作品について理解を深めた。

第1回 昭和56年7月11日

話題提供者 東京芸術大学助教授 鈴木治平氏

テ — マ 彫金工芸の魅力

企画展「金工芸・信田洋回顧展」にともない、金工芸についていろいろ話題提供されたが、特にスライドによる金工芸の技法の説明は、本展を鑑賞する上で非常に参考になった。また、そのあと本展会場で実際の作品についてそれぞれわかりやすく解説され、本展の作品についてより深く理解することができた。

第2回 昭和56年8月8日

話題提供者 シニアディレクター

兼巻通高氏 ほか

テ — マ 浅井真の芸術

企画展「浅井真展」にともない、兼巻御夫妻より話題提供された。浅井真のひとと芸術についていろいろ語られたが、特に浅井真が戦後まもなく画壇との交流を断っていった背景等のお話しは、浅井真の芸術を理解する上で有意義であった。また、スライドによる当時の写真とそれにまつわるエピソード等も興味深かった。

第3回 昭和56年10月3日

話題提供者 浮世絵研究家 永野方治氏

テ — マ 肉筆浮世絵の見方

特別展「肉筆浮世絵展」に出品されている作品の主なものについて、スライドにより話題提供された。作者や作品についての解説は本展の作品を理解するのに役立った。また、本展会場で解説されたときは、参加者から多くの質問も出され、また、本展を見学されて、いた方々も加わり盛況のうちに終わった。



第1回

第4回 昭和57年1月10日

話題提供者 本館館長 高橋在久

テ — マ 浅井の遺業

特別展「浅井忠と京都洋画壇の人々」にともない、本館館長より話題提供された。そして、浅井忠がヨーロッパへ留学し、帰国後、京都へ移住してからその生涯を終えるまでの活躍ぶりについて話されたが、特に浅井が京都へ移住しようとするに至った経緯、とりわけアール・ヌーヴォーへの共鳴と実践については興味深かったという声が多かった。

第5回 昭和57年2月6日

話題提供者 日本画家 渡辺 学氏

テ — マ 私の絵画観

企画展「現代美術選抜展」にともない、本展にも出品されている渡辺氏より話題提供された。氏は日常の創作活動を通して、制作の心構え、姿勢などについて話されたが、特に大切にしているのは“ものをよくみる”ということであるという。また、本展の会場において氏の作品についても解説され、わかりやすく興味深かったと好評であった。



第5回

第 5 回美術館夏季大学

昨年までの「日本洋画史の流れ」をさらに掘り下げ、近代日本洋画の形成に大きな影響を与えた浅井・黒田の業績と近代日本画の推移・展開に焦点をあてて開講した。

期 日 昭和56年7月31日・8月1日

参加者数 110名

内 容

日	時	講 師	課 題	内 容	日	時	講 師	課 題	内 容
7月31日	午 前	高橋在久 (千葉県立美術館長)	浅井忠と京都洋画壇	1. いまなぜ浅井忠かに答えて 2. 京都へ向かった浅井忠の心情 3. 浅井忠の京都での遺業の数々 4. 京都での浅井忠の周辺の人々	8月1日	午 前	陰里鐵郎 (東京国立文化財研究所主任研究官)	黒田清輝と白馬会の人々	1. 黒田清輝・久米桂一郎帰国時の日本洋画界 2. 明治30年代における洋画の革新 3. 文展の成立と白馬会の終焉——外光派から印象派へ
	午 後	細野正信 (東京国立博物館主任研究官)	京都派の特徴	1. 江戸時代の京派 2. 明治初期の京都画壇 3. 初期文展の京都派 4. 日本画における写実性と装飾性 5. 国画創作協会他		午 後	田中 稔 (美術評論家)	昭和日本画の揺籃期	1. 昭和6年美術学校卒業“花の6年組” 2. 美校在校中(昭和7年)に特展をとった杉山寧 3. 昭和8年の東山魁夷の渡欧 4. 昭和9年に結ばれた新日本画研究グループ「瑠爽画社」



見学会

友の会と共催で行われ、美術作品や文化財を訪ねながら同好の親睦を深めるものである。

房総の海と町を訪ねて

期 日 昭和56年6月28日

参加者数 77名

日本洋画史のなかにおける写生地としての房総に視点を置き、多くの著名な作家が訪れ宿泊した太海の画家の宿（江沢館）を見学してから小湊の誕生寺へ参詣し、大多喜町へ回り、県立総南博物館を見学して楽しい旅を終えた。



やきもののふるさとを尋ねて

期 日 昭和56年10月3日・4日（1泊2日）

参加者数 41名

まず宇都宮で栃木県立美術館を見学し終わって日光東照宮に参拝し、宿舎の鬼怒川温泉「あさやホテル」に到着。翌日は益子へ直行し、浜田庄司の益子参考館から塚本窯へ廻り、作陶の實際をひととおり見学して有意義な旅を終わった。

VOL.8 No.1 (56.5.25発行 6頁)

- 目次
- ・ クールベさん今日は
 - ・ 常設収蔵作品展
 - ・ 新収蔵作品紹介(Ⅰ)
 - ・ 55年度寄贈作品
 - ・ 美の泉
 - ・ 職員異動
 - ・ お知らせ

VOL.8 No.2 (56.7.20発行 6頁)

- 目次
- ・ 特別展「肉筆浮世絵展」
 - ・ 房総の美術家シリーズ(11)浅井真展
 - ・ 金工芸 信田 洋回顧展を終えて
 - ・ 新収蔵作品紹介(Ⅱ)
 - ・ 美の泉
 - ・ お知らせ

VOL.8 No.3 (56.9.21発行 6頁)

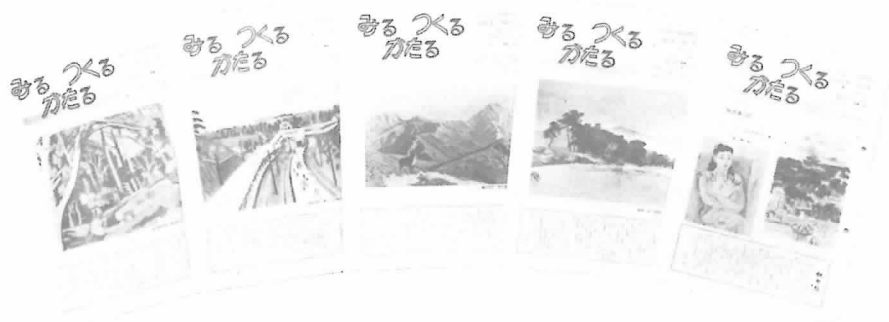
- 目次
- ・ 特別展「肉筆浮世絵展」に際して
 - ・ 美術館夏季大学の5年間を顧みて
 - ・ 千葉県移動美術館
 - ・ 新収蔵作品紹介(Ⅲ)
 - ・ 美の泉
 - ・ 談話コーナー
 - ・ お知らせ

VOL.8 No.4 (56.12.1発行 6頁)

- 目次
- ・ 特別展「浅井忠と京都洋画壇の人々」
 - ・ 浅井忠の京都転任考
 - ・ 新収蔵作品紹介(Ⅳ)
 - ・ 美の泉
 - ・ ボランティア活動
 - ・ お知らせ

VOL.8 No.5 (57.2.8発行 6頁)

- 目次
- ・ 論評への謝辞
 - ・ 特別展「浅井忠と京都洋画壇の人々」を終えて
 - ・ 第15回現代美術選抜展
 - ・ 昭和56年度後期収蔵作品展
 - ・ 新収蔵作品紹介(Ⅴ)
 - ・ 受難の名画、本館へ寄託
 - ・ 美の泉



友の会(葉美会)

(1) 運営方針

- ① みる・かたる・つくる美術活動に積極的な参加促進をはかる
- ② 会員加入の促進と県民アトリエ事業への積極的な参加
- ③ 組織の拡充と活動の充実をはかる

(2) 組 織

人数 会員数 978名

名称 千葉県立美術館友の会

●千葉県立美術館友の会役員

職 名	氏 名	分担
顧問	浅 見 喜 舟	
名誉会員	松 戸 節 三	
〃	市 原 正 夫	
会 長	鈴 木 民 三	
副 会 長	江 尻 幹 雄	親睦
〃	高 橋 在 久	
〃	始 関 妙	広報
事務局 長	松 本 衛	
監 事	小 室 守 一	事業
〃	三 宅 寿 美 子	事業
〃	高 梨 義 男	
〃	(56.6.15付で退任)	
〃	内 山 昭 氏	
〃	(56.6.16付で就任)	
理 事	安 田 博 亮	総務
〃	新 城 瑠 璃 子	総務
〃	押 尾 禎 一	○広報
〃	平 野 元 三 郎	親睦
〃	大 藤 敬 美	○親睦
〃	石 井 秀 雄	広報
〃	青 木 了	○事業
〃	中 村 幸 子	親睦
〃	大 里 功	総務
〃	今 井 博	総務
〃	安 増 順	
〃	高 橋 瑛	
〃	高 木 正	
〃	佐 久 間 文 孝	
評 議 員	大 高 鐘 藏	
〃	木 内 俊 雄	

職 名	氏 名	分担
評 議 員	安 達 園 子	
〃	横 沢 正 雄	
〃	高 橋 喜 一 郎	
〃	芳 垣 良 一 郎	
〃	加 藤 信 子	
〃	西 田 葆	
〃	藍 野 正 和	
〃	松 本 康 雄	
〃	高 宮 知 代	
〃	植 木 照	
〃	広 瀬 慶 子	
〃	長 谷 川 芳 衛	広報
〃	村 井 和 正	
〃	渡 辺 美 智 子	
〃	和 田 修 彦	
〃	林 美 貴 枝	
〃	日 暮 幸 子	広報
〃	酒 井 千 代 子	
〃	近 藤 愛 子	
〃	佐 藤 裕 子	
〃	今 井 忠 昭	
	○印 代表者	

(3) 事 業

- ① 友の会だより“しおさい”の刊行、県民アトリエの各種“実技”講座への積極的な参加、美術鑑賞の旅、友の会講演会、ボランティア研修会などを本館と共催で行った。

② 第6回葉美会展

会 期 昭和57年1月26日～2月7日

展示点数 91点

実技講座での作品や家事や勤務の合間に製作した苦心の力作を持ちより、“つくる”活動から、“みる”“かたる”活動を通して、美術愛好者の親睦を深め、楽しさを分かち合う機会とした。最終日には講師の武内和夫氏から出品作品の一点一点について、適切な指導講評が行なわれた。

No.28 (56.6.18発行, 6 頁)

- 目次
- ・二年目を迎えた「解説ボランティア」 友の会
会員から参加
 - ・会員の皆様へ
 - ・日曜断想
 - ・友の会理事会・評議員会開く
 - ・56年度友の会役員
 - ・昭和56年度事業計画
 - ・展覧会あんない
 - ・千葉県立美術館友の会会則

No.29 (56.8.20発行, 6 頁)

- 目次
- ・春の美術鑑賞の旅終わる
 - ・参加者からのはがき通信
 - ・「浅井真展」開く
 - ・北総の文化財めぐり(2) 常灯寺の薬師像
 - ・秋の旅行ご案内
 - ・美術館紹介(4) 栃木県立美術館
 - ・美術館歳時記 4
 - ・展覧会あんない
 - ・実技講座のご案内

No.30 (56.11.16発行, 6 頁)

- 目次
- ・日本画入門講座開く その心と技術を学ぶ
 - ・日本画入門講座に参加して
 - ・やきもののふるさとを訪ねて
 - ・北総の文化財めぐり(3) 千騎ヶ岩
 - ・美術館紹介(5) 日本民芸館
 - ・美術館歳時記 5
 - ・展覧会あんない
 - ・第 6 回葉美会に出品を

No.31 (57.1.26発行, 4 頁)

- 目次
- ・梅原画伯の「北京秋天」美術館で 2 月 28 日まで
展示
 - ・「ヨーロッパ美術館めぐり」へのお誘い
 - ・展覧会あんない

No.32 (57.3.31発行, 6 頁)

- 目次
- ・第 6 回葉美会展盛会裡に終了 会員60名の91
点を展示
 - ・第 6 回葉美会展を見て
 - ・北総の文化財めぐり(4) 描かれた犬吠崎
 - ・ヨーロッパ美術館めぐりの旅
 - ・展覧会あんない
 - ・美術歴史探究の旅にご参加を
 - ・新年度友の会会員募集



昭和56年度事業一覧

月	本館企画の展覧会	普及事業	団体展
4	4.1 常設 収蔵作品展 4.19 4.25 常設 収蔵作品展		第7回弥生書展 (3/31～4/5) 第4回千葉新芸術展 (4/7～4/12) 第18回全日本総合書道大覧覧会 (4/14～4/19) 第4回等迦千葉支部美術展 (4/21～4/26) 第8回千葉新協展 (4/28～5/5) 第8回千葉美術工芸展 (4/28～5/10) 第7回歩会彫刻展 (4/28～5/10)
5		・洋画入門 (5/9・10・13・14) ・デッサン入門 (5/15・16) ・彫塑入門 (5/12・13・19・20・26・27)	第8回千虹会日本画展 (5/7～5/17) 千葉市アマチュア美術クラブ展 (5/12～5/17) 二科千葉支部展 (5/19～5/24) 二紀千葉支部展 (5/19～5/24) 日本教育大学協会第2部会書道部門 教官作品展 (5/26～5/31)
6		・洋画研修 (5/30・31) ・陶芸入門 (6/4・5・6・7)	第4回一陽会千葉支部展 (6/2～6/7) 第12回表美展 (6/2～6/7) 千葉県書道協会展 (6/9～6/14) 新槐樹社千葉支部展 (6/9～6/14) 第2回千葉全展 (6/16～6/21) 第5回墨の県展 (6/23～6/28) 第4回精鋭展 (6/23～7/5) 千葉書壇秀抜展他 (6/30～7/5)
7	7.7 金工芸 信田 洋回顧展 7.19 7.23 房総の美術家 シリーズ (11) 浅井 真 展	・洋画研修 (1期) (7/4・5) ・陶芸入門 (1期) (7/7・14) ・美術を語る会 (1) (7/11) ・洋画入門 (1期) (7/11・12) ・書芸入門 (1期) (7/22・23・24) ・てん刻入門 (1期) (7/29・30) ・第5回美術館夏季大学 (7/31・8/1)	第5回千葉美術シンポジウム展& 青枢展 (7/7～7/19) 第11回千葉市水墨画同好会連合会展 (7/21～7/26) 第1回日本国際美術家協会展 (7/28～8/2) 龍峽書道会千葉県入展 (8/4～8/9) 千葉県写真家協会展 (8/4～8/9) 第1回千葉サンケイ現代洋画展 (8/11～8/16) 千葉市教職員美術展 (8/18～8/30) 第11回いてふ会彫刻展 (8/18～8/30) 子供と教師の作品展 (8/25～8/30)
8	8.20	・美術を語る会 (2) (8/8) ・デッサン入門 (2期) (8/25・26) ・てん刻入門 (2期) (8/29・30)	第10回写真千葉県展 (8/25～9/6) 静雅書道会小中学部千葉地区展 (9/1～9/6) 第8回文化書道千葉県連合会公募展覧会 (9/1～9/6)
9	9.6 9.12 特別展 肉筆浮世絵展	・洋画研修 (1期) (9/5・6) ・七宝焼入門 (1期) (9/12・13) ・特別展美術講演会 (9/20)	中国現代画家展 (9/1～9/6) 二科写真部千葉支部展 (9/8～9/13) 第21回白扇書道会展 (9/8～9/13) 第7回千葉県児童美術展 (9/15～9/20) 新構造県支部美術展 (9/15～9/20) 千葉81展 (9/22～9/27) 塑の会展 (9/29～10/4) 第28回千葉県勤労者美術展 (9/29～10/4) ファンシー洋画展 (9/29～10/4) 第31回千葉デザイン展 (9/29～10/4)

月	本館企画の展覧会	普及事業	団体展
10	10.7 第5回 10.14 千葉県移動美術館 10.20 (流山市郷土資料館) 10.24 第5回 千葉県移動美術館 11.1 (八日市場市中央公民館)	・美術を語る会(3)(10/3) ・日本画入門 (10/10・11・13・14・15・16) ・デッサン入門(3期) (10/13・14) ・洋画研修(2期) (10/24・25) ・彫塑入門(2期) (10/27・28) ・彫塑入門(2期) (11/3・4・10・11) ・七宝焼入門(2期) (11/14・15) ・陶芸入門(2期) (11/17・18・19・20) ・洋画研修(2期) (11/21・22) ・てん刻入門(3期) (11/28・29) ・洋画入門(2期)(12/5・6) ・特別展美術講演会(12/13) ・陶芸入門(2期) (12/17・22) ・洋画研修(2期) (12/19・20)	千葉市小・中・養護学校児童生徒 作品総合展 (10/6～10/14) 第33回県展 (10/24～11/15) 千葉県高等学校総合芸術祭(書道・ 美術・工芸展) (11/19～11/29) 芸術祭参加写真展 (11/19～11/29) 屈折の養分 (12/1～12/6) 第1回日本春秋書院千葉県書道連盟展 (12/1～12/6) 第26回こども県展 (12/8～12/20)
11			
12	12.5 特別展 浅井 忠と京都洋 画壇の人々	・美術を語る会(4)(1/10) ・洋画入門(2期) (1/16・17) ・書芸入門(1/27・28) ・版画入門(1/24・31)	第17回登龍社・宮坂会書初展 (1/5～1/10) 千葉県大学美術連盟展 (1/5～1/10) 第4回千葉展 (1/12～1/24) 親子絵画展 (1/26～1/31) 葉美会展 (1/26～2/7)
1	1.17 1.22 収蔵作品展 1.29 第15回 現代美術選抜展 2.11	・美術を語る会(5)(2/6) ・版画入門(2/7・14・21・28) ・七宝焼入門(3期) (2/27・28)	第34回千葉県小中学校書初展覧会 (2/2～2/7) 千葉大学教育学部美術科卒業制作展 (2/16～2/21) 千葉大学生書道展 (2/16～2/21) 第7回千葉県民写真展 (2/16～2/28) 第7回子ども造形展 (2/23～2/28) 第8回雁鴻会展 (2/23～2/28)
2		・書芸研修(3/6・7)	第13回千葉市民美術展覧会(3/2～3/22) 第29回書星教育部展 (3/24～3/28)
3	3.31		

利用状況

昭和56年度入館者一覧表

種別 月	開館 日数	個 人			団 体						人 数 合 計	備 考
		一般成人	大・高生	中・小生	一 般 成 人		大 ・ 高 生		中 ・ 小 生			
					人数	団数	人数	団数	人数	団数		
4	26	4,410	274	1,414	123	5	418	3	256	3	6,895	
5	27	10,579	428	3,234	180	5	0	0	1,235	9	15,656	
6	25	7,584	277	946	375	9	0	0	1,328	7	10,510	
7	27	7,599	331	1,267	30	1	0	0	64	2	9,291	
8	26	7,229	408	2,247	154	4	0	0	80	2	10,118	
9	26	13,486	684	4,275	385	9	186	2	176	2	19,192	特別展 肉筆浮世 絵展
10	19	15,956	1,072	8,792	270	7	420	1	2,124	16	28,634	
11	23	13,134	1,675	4,890	329	11	384	6	155	3	20,567	
12	22	7,352	562	4,861	193	5	0	0	591	14	13,559	特別展 浅井忠と 京都洋画 壇の人々
1	24	10,171	597	5,436	141	4	0	0	205	1	16,550	
2	24	6,712	728	2,518	272	6	0	0	671	7	10,901	
3	26	9,664	476	3,620	194	7	0	0	243	4	14,197	
計	295	113,876	7,512	43,500	2,646	73	1,408	12	7,128	70	176,070	1日平均596人
累計	2,123	1,029,901	開館以来									

地域別入館者状況 昭和57年3月31日現在(56.4.1~57.3.31)

種別 月	開 館 日 数	県 内		県 外		そ の 他 外 国(人)
		千葉市(人)	その他の県内(人)	東京都(人)	その他の県外(人)	
4	26	3,936	2,628	162	160	9
5	27	9,384	5,789	277	199	7
6	25	5,344	4,832	176	151	7
7	27	5,598	3,068	349	258	18
8	26	5,675	3,896	306	229	12
9	26	11,001	7,300	464	412	15
10	19	22,358	5,870	222	176	8
11	23	12,478	7,348	384	347	10
12	22	7,938	5,248	212	153	8
1	24	9,077	6,667	463	343	0
2	24	6,754	3,789	169	183	6
3	26	9,343	4,407	189	247	11
計	295	108,886	60,842	3,373	2,858	111
累計		169,728		6,231		111

日誌抄

- | | | | |
|-------|--------------------------|--------|-------------------------------|
| 4月11日 | 友納武人衆議院議員来館 | 10月7日 | 移動美術館始まる（11月1日まで） |
| 25 | 友の会役員会 | 10 | 日本画入門講座開講 |
| | | 28 | 熊本県立美術館副館長来館 |
| 5月9日 | 洋画入門講座開講 | 11月10日 | 富山県立近代美術館より来館 |
| 12 | 彫塑入門講座開講 | 11 | 彫塑入門講座（最終日） |
| 15 | デッサン入門講座開講 | 14 | 七宝焼入門講座（2期）開講 |
| 22 | 宮城県美術館開設準備室より来館 | 17 | 陶芸入門講座（2期）開講 |
| 6月2日 | 浮世絵太田記念館美術館より来館 | 28 | てん刻入門講座（3期）開講 |
| 4 | 陶芸入門講座開講 | 12月5日 | 特別展「浅井忠と京都洋画壇の人々」始まる（1月17日まで） |
| 23 | 県博物館協会役員会・総会 | | 洋画入門講座（2期）開講 |
| 28 | 友の会美術鑑賞の旅 | 13 | 美術講演会 講師・杉本秀太郎氏 |
| 7月7日 | 「金工芸 信田洋展」始まる | 18 | 神奈川県立近代美術館より来館 |
| 11 | 第1回美術を語る会 | 20 | 洋画研修講座（2期・最終日） |
| 22 | 書芸入門講座開講 | 1月6日 | 県知事来館 |
| 23 | 「浅井真展」始まる | 8 | 美術館資料審査委員会 |
| 28 | 美術館協議会 | 10 | 第4回美術を語る会 |
| 29 | てん刻入門講座開講 | 20 | 書芸入門講座（2期）開講 |
| 31 | 美術館夏季大学開催（8月1日まで） | 24 | 版画入門講座開講 |
| 8月3日 | 京都市美術館学芸課長来館 | 29 | 第15回現代美術選抜展始まる（2月11日まで） |
| 8 | 第2回美術を語る会 | 2月6日 | 第5回美術を語る会 |
| 24 | 美術館資料審査委員会 | 19 | 博物館職員研修会 |
| 25 | デッサン入門講座（2期）開講 | 25 | 友の会海外研修旅行（3月6日まで） |
| 29 | てん刻入門講座（2期）開講 | 27 | 七宝焼入門講座（3期）開講 |
| 9月5日 | 中華人民共和国駐日大使館より来館 | 3月6日 | 書芸研修講座開講 |
| 12 | 七宝焼入門講座開講 | 10 | 愛媛県立美術館より来館 |
| | 特別展「肉筆浮世絵展」始まる（10月14日まで） | 17 | 美術館協議会 |
| 20 | 美術講演会 講師・山口桂三郎氏 | 24 | ボランティア促進協議会 |
| 10月3日 | 第3回美術を語る会 | | |
| | 友の会秋の旅行（4日まで） | | |

関係令規

1. 博物館管理規則

昭和45年12月25日教育委員会規則第22号

目 的

第1条 この規則は、教育機関設置条例（昭和32年千葉県条例第4号）第20条に規定する博物館（以下「館」という。）の管理に関し必要な事項を定めるものとする。

（開館時間）

第2条 館の開館時間は、午前9時から午後4時30分までとする。

2. 館の長（以下「館長」という。）は、必要があると認めるときは、前項の規定にかかわらず、開館時間を変更することができる。

（休館日）

第3条 館の休館日は、次のとおりとする

- 一 定期休館日 月曜日（その日が国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）第2条に規定する日に当たるときは、その翌日）
- 二 国民の祝日に関する法律に規定する休日
- 三 年始休館日 1月1日から1月4日まで
- 四 年末休館日 12月26日から12月31日まで
- 五 臨時休館日 特別の事情により、館長が休館を必要と認めた日

2. 前項の休館日であっても、館長が特に必要と認めた場合は、館の全部又は一部を開館することがある。（入館の制限）

第4条 館長は、次の各号の一に該当する者に対して入館を禁じ、又は退館を命ずることができる。

- 一 特別展覧会を観覧しようとする者で、所定の観覧券を所持しないもの
- 二 適当な指導者、保護者又は付添人のない6歳に満たない者
- 三 でい酔者、伝染病患者その他観覧者に不快の感を与えると認められる者

（観覧券等）

第5条 館の特別展覧会観覧券は、別記第1号様式とする。

2. 団体（20人以上の場合をいう。）で観覧しようとするときは、あらかじめ団体観覧申込書（別記第2号様式）により、館長に申し込まなければならない。（禁止行為）

第6条 入館者は、次に掲げる行為をしてはならない。

- 一 展示品に手をふれること及び展示室でインク、

墨汁類を使用すること。

二 許可なくして展示品を模写し、又は撮影すること。

三 所定の場所以外の場所において喫煙又は飲食すること。

四 その他他の入館者の妨げになるような行為をすること。

（損害の賠償）

第7条 館長は、入館者が館の展示品、建物若しくは備品等をき損し、又は汚損したときは、現品又は相当の代価をもって弁償させることがある。

（委 任）

第8条 この規則の施行に関し必要な事項は、教育長の承認を得て、館長が定める。

附 則

この規則は、昭和46年1月15日から施行する。

別記様式（省略）

2. 使用料及び手数料条例（抜粋）

昭和31年3月31日条例第6号

（趣 旨）

第1条 県が徴収する使用料及び手数料（以下「使用料等」という。）に関しては、別に規定するもののほか、この条例の定めるところによる。

（使用料等の徴収）

第2条 県が所有し、又は管理する行政財産及び公の施設（以下「財産等」という。）の使用並びに特定の個人のためにする事務（以下「事務」という。）に関し、法令及び他の条例に規定するもののほか、当該財産等を使用しようとする者から使用料を、当該事務を依頼しようとする者から手数料を徴収するものとする。

（種類及び額）

第3条 前条の規定により使用料等を徴収する財産等及び事務の種類並びにその使用料等の額は別表第一に掲げるとおりとする。

（中 略）

別表第一抜粋

財産又は事務の種類	手数料	区 分	単 位	額
博 物 館	入館料	特別展覧会	1人1回につき	300円以内

3. 展示室使用料

昭和56年4月1日千葉県教育委員会指令第116号

- 千葉県立美術館展示室等の使用料については、使用料及び手数料条例第5条第3項に基づき減免することとし、当分の間次表のとりの額とする。

区分	室名	面積	使用料 (午前9時から午後5時まで)	
			観覧料無料、 物品を販売しない場合(減 免率3分の2)	観覧料有料又は 物品を販売する場合(減 免率3分の1)
展示棟	第一展示室	438㎡	5,500円	11,000円
	第二展示室	400㎡	5,000円	10,000円
	第三展示室	469㎡	6,000円	12,000円
	第四展示室	403㎡	5,500円	11,000円
	第五展示室	824㎡	11,000円	22,000円
	第六展示室	330㎡	4,500円	9,000円
	第七展示室	567㎡	7,500円	15,000円
県民エ ア棟	全展示室	3,431㎡	43,000円	86,000円
	講堂	259㎡	4,500円	9,000円
	研修室	75㎡	1,500円	3,000円

ただし、県及び県教育委員会が共催する場合並びに国又は他の地方公共団体の主催ないし共催する行事に係る使用の場合は無料とし、県教育委員会が特に教育的、文化的意義を認め後援する行事に係る使用の場合は上記の半額とする。

- 千葉県立美術館展示室等の使用の許可に関する取扱いは、別紙「千葉県立美術館展示室等の使用許可に関する取扱要綱」によるものとする。

●千葉県立美術館友の会会則

(名称)

第1条 本会は、千葉県立美術館友の会という。(略称、美業会)(事務所)

第2条 本会は、事務局を千葉県立美術館内におく。

(目的)

第3条 本会は、千葉県立美術館(以下「館」という。)の活動に協力し、楽しいふんい気のなかで、教養を豊かにし、美術文化の向上をはかり会員相互の親睦を深めることを目的とする。

(事業)

第4条 本会は、前条の目的を達成するため次の事業をおこなう。

- 1 館の展覧会の見学鑑賞
- 2 講演会、講習会、研究会等
- 3 館外見学会
- 4 機関紙等の編集刊行
- 5 その他目的達成に必要な事業

(会員)

第5条 本会は、会の目的に賛同するものをもって組織する。

1. 会員には次の特典がある。

- ①館の主催又は共催による展覧会観覧の優待
- ②美術館報「みる・かたる・つくる」ならびに友の会機関紙の配布
- ③本会発行の図録等の配布及び割引購入
- ④本会事業への参加

2. 本会活動に協力し、賛助会費を納めたものは賛助会員とする。

(会員の加入・退会)

第6条 本会に加入する場合は申込書に入会金(500円)を添えて事務局に提出し、会員証の交付を受ける。退会の際は退会届を提出する。

(役員)

第7条 本会に次の役員をおく。

会長1名 副会長3名(ただし内1名は美術館長があたる)理事若干名 事務局長1名 監事3名 評議員若干名

1. 会長・副会長・理事・事務局長・監事の選出は評議員会において推挙する。

2. 役員の任期は2年とする。ただし再任は防げない。

(役員等の任務)

第8条 本会の役員の任務は次のとおりとする。

1. 会長は本会を代表して会務を総理し、会議を召集し、その議長となる。
2. 副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはこれを代理する。
3. 理事は会の運営にあたる。
4. 事務局長は会務を処理する。
5. 監事は本会会計の監査をする。

(顧問・名誉会員)

第9条 この会に顧問及び名誉会員をおくことができる。名誉会員は評議員会で推挙する。

(支部)

第10条 地域、並びに職域ごとに20名以上の会員を有する場合は支部をおく。

(評議員会)

第11条 各支部より20名につき1名の割で推せんされた代表と賛助会員及び講座代表をもって評議員会を構成する。評議員会は毎年1回以上開き、事業計画、予算、役員の決定その他の重要方針を決議する。

(会費)

第12条 本会の普通会員は毎年度当初に年額1500円の会費を納入する。

(経費)

第13条 本会の経費は会費、寄附金、事業収益金、その他の収入をもってあてる。

(会計年度)

第14条 本会の会計年度は毎年4月1日にはじまり、翌年3月31日におわる。

(職員)

第15条 本会の事務職員は館に勤務する者以外から、会長が委嘱する。

(付則)

1. 本会の会則は評議員会で出席者の過半数の同意を得なければ変更することができない。

2. 本会則は昭和50年6月28日より施行する。

●昭和51年5月29日一部改正 ●昭和52年4月21日一部改正

●昭和53年4月22日一部改正 ●昭和54年4月28日一部改正

●昭和56年4月28日一部改正

昭和57年度展覧会事業計画

常 設 展

常 設 収蔵作品展

会期 4月1日～9月5日, 12月3日～1月16日,
3月3日～3月31日
内容 本館収蔵作品を広く公開し, また資料コ
ーナーなどを設け, 多面的に収蔵作品の紹
介と顕彰に努める。

特 別 展

絵地図の魅力展

会期 9月11日～10月13日
内容 人間の地理的世界観を図形化した地図の
うち, 本県ゆかりの伊能図をはじめ, 屏風
絵地図, 鳥かん図など絵地図の絵画性を紹
介し, その理解鑑賞の機会とする。

金工の世界

会期 1月21日～2月14日
内容 日本の金工界の先駆者として本県にゆか
りの深い香取香真, 津田信夫をはじめ, 日
本の近代金工作家の作品を中心に展覧し,
技法にも触れながら多面的に紹介をする。

企 画 展

嶋川誠一展 —画業70年の回顧—

会期 5月27日～6月17日
内容 独立美術協会で活躍し, 洋画に新しい方
向を示した茂原市出身の嶋川誠一氏の画業
を広く紹介する。

中西利雄展

会期 7月22日～8月19日
内容 新制作派協会の結成に参加して会員とな
り, 近代的造型性に富んだ水彩画を生み出
した中西利雄の業績をたどる。

第6回千葉県移動美術館

会期 9月21日～10月3日(佐倉市中央公民館)
10月6日～19日(柏市中央公民館)
内容 本館収蔵作品の鑑賞の機会を広く県民に
拡大するとともに, 本館を紹介し, 地域文
化の振興に寄与するため, 県内2か所の会
場で美術展覧会を行う。

職 員

館 長 高 橋 在 久
副 館 長 安 増 順
庶務課
主査(課長) 内 山 昭 氏
副 主 査 田 辺 正 憲
主任主事 菅 井 富 美 子
主 事 一 杉 徹
運 転 手 篠 原 恒 雄
主任用務員 長 島 則 子
学芸課
主査兼課長 高 橋 瑛
副主査(普及室長) 高 木 正

副 主 査 加 曾 利 和 夫
文化財主事 鈴 木 喜 久 夫
学 芸 員 小 野 禮 子
文化財主事 宮 内 速 男
学 芸 員 米 田 耕 司
〃 大 久 保 守
〃 藤 川 正 司
〃 前 川 公 秀
主 事 武 内 喜 美 子
学 芸 員 山 内 章 子
〃 小 泉 幸 代
嘱 託 松 本 衛

利 用 案 内

開館時間 午前9時より午後4時30分まで

休館日 ・月曜日（ただし、月曜が祝日のときは開館し、翌日休館）
・年末年始（12月26日～1月4日）
・展示替等のため、必要があるとき。

入場料 ・無料（ただし、特別展は有料）

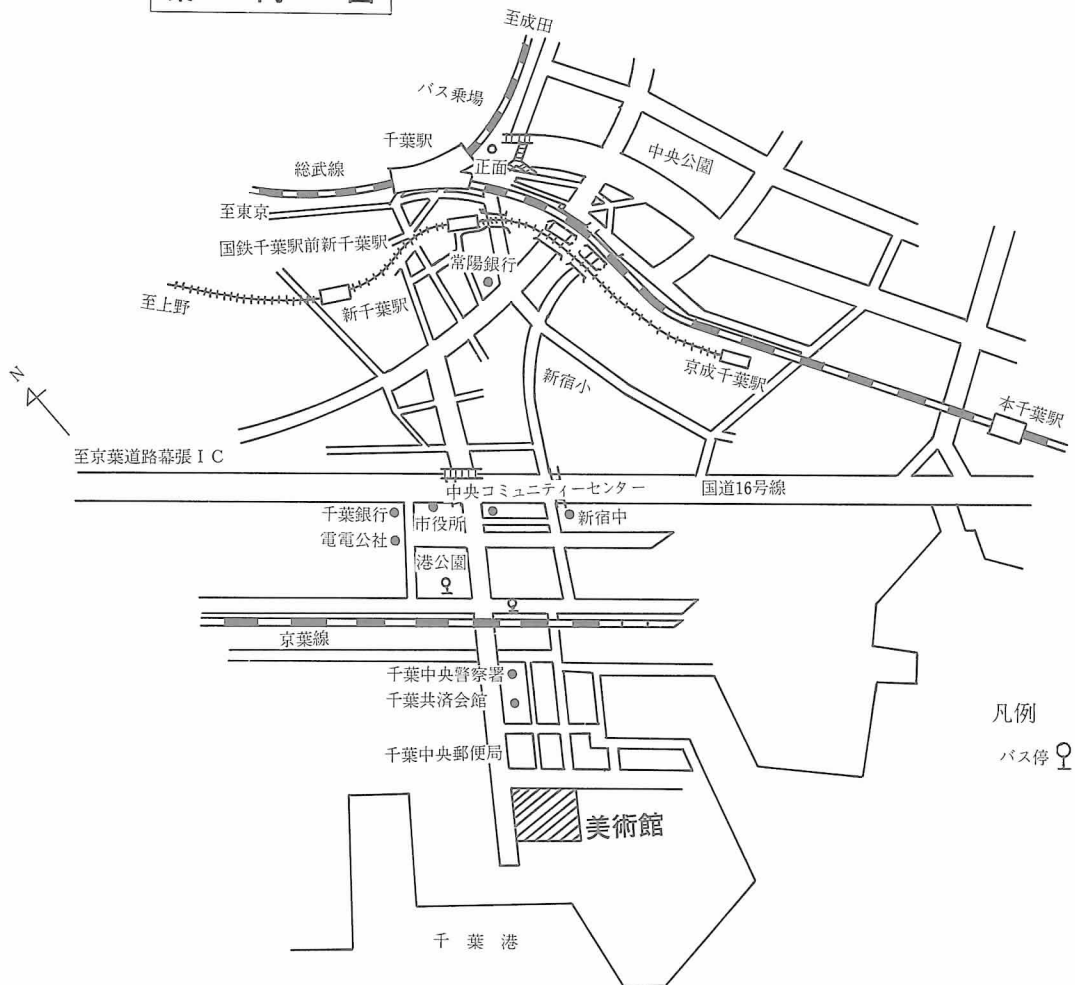
団体観覧 ・団体で来館されるとき、あらかじめご連絡あれば作品等の解説をします。

交通案内

国鉄千葉駅前バス停③④番より「千葉市役所行」小湊
京成、中央各バスで終点下車、徒歩約10分・⑦番「新
港行」小湊、京成バスで中央署前下車、徒歩約6分

※日曜・祝日に限りそごうデパート前より美術館行き
バスが運行されています。

案 内 図



みる・かたる・つくる

千葉県立美術館年報（昭和56年度）

発行 千葉県立美術館

〒260 千葉市中央港1-10-1

TEL 0472 (42) 8311

印刷 ワタナベ印刷株式会社
